

宮城県仙台市

# 大年寺山横穴墓群

— 平成18年度調査 —

2007年3月

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

# 大年寺山横穴墓群

— 平成18年度調査 —

2007年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

大年寺山をはじめ愛宕山を含む仙台市青葉区向山地区には、古くから多くの文化財のあるところです。江戸時代から信仰を集めてきた愛宕神社や、虚空蔵堂などがあり、現在でも参詣する人々が絶えません。また周辺の斜面地には多くの横穴墓が存在することでも知られており、中でも愛宕山横穴墓群は全国的に類例の少ない装飾横穴墓が発見されている地域です。

今回調査されました大年寺山横穴墓群は、マンション工事中に偶然発見され調査に至ったものです。都市化された仙台市中心部にあって、住宅地に現れた横穴墓群の風景は驚きとともに、昭和62年に調査されて久しい同横穴墓群に、新たな調査成果を書き加えることになりました。これは7世紀から8世紀にかけての仙台の歴史を知る上で非常に注目されるものであります。

仙台市内におきましては開発が著しく、埋蔵文化財は年々その姿を失いつつあるのが現状です。今回発見された横穴墓も調査後は失われ、本報告書の記録によってのみ伺い知るだけとなります。このようなことから、この報告も貴重な記録として、郷上の歴史を知る手がかりとなれば幸いです。末尾ながら、調査の遂行にあたっては土地所有者の渡邊英夫氏より多大な協力を得たことを報告し、厚く御礼を申し上げます。

平成19年3月

仙台市教育委員会  
教育長 奥 山 恵美子

## 例　　言

- 1 本書は、仙台市教育委員会が実施した民間開発事業に伴う大年寺山横穴墓群の発掘調査報告書である。これに係わる発掘調査、報告書作成は事業者の負担において実施している。
- 2 本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係 長島榮一が担当した。
- 3 本書に掲載された出土人骨については、国立科学博物館 坂上和弘氏に鑑定をお願いし、貴重な報告を寄せていただいた。
- 4 本書に掲載された鉄刀についてのX線透視ならびに撮影については、東北歴史博物館及川規氏の協力を得た。
- 5 本書に係わる遺物・写真・実測図面等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。
- 6 「銀」に関する論考を村田文夫氏より賜った。貴重な類例の集成、検討であり、ここに記して謝したい。

## 凡　　例

1 本書で使用した土色は「新版標準七色帖」(小山・竹原:1976)に準拠している。

2 断面図・平面図の標高値は、海拔高度を示している。

3 遺物の登録は、以下の仙台市教育委員会が使用している分類と略号によっている。

A:縄文土器 B:弥生土器 C:土師器(非クロクロ) D:土師器(クロクロ)

E:須恵器 F:丸瓦 G:平瓦 I:陶器 J:磁器

K:石器・石製品 L:木製品・杭材 N:金属製品 P:土製品

4 土師器実測図における網は、黒色処理されていることを示している。

5 平面図中の座標系は国家座標（平面直角座標系X）である。

## 目 次

### 序 文

### 例 言 ・ 凡 例

I	はじめに .....	1
1.	調査要項 .....	1
2.	調査経過 .....	1
II	遺跡の位置と環境 .....	2
1.	遺跡の位置と地理的・歴史的環境 .....	2
2.	周辺での横穴墓の調査から .....	2
III	調査の方法 .....	4
IV	発見された遺構と遺物 .....	7
V	まとめ .....	22
付章	大年寺横穴墓群出土人骨について 国立科学博物館 坂上和弘 .....	38

# I はじめに

## 1. 調査要項

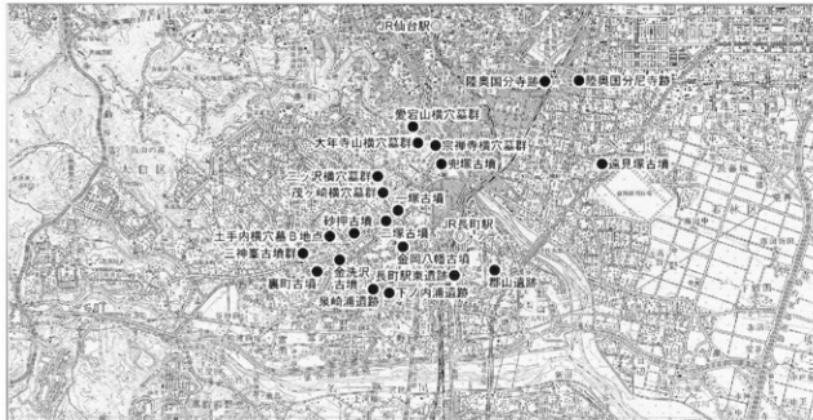
遺跡名	大年寺山横穴墓群（宮城県遺跡番号01293）
調査地点	仙台市太白区向山四丁目94-3, 4
調査期間	確認調査 平成18年8月1日～8月5日 本調査 平成18年8月7日～8月18日
調査対象面積	490m <sup>2</sup>
調査面積	250m <sup>2</sup>
調査原因	共同住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	係長 篠原信彦 主査 工藤哲司、主浜光朗、原河英二、渡部弘美、 主任 長島栄一、佐藤淳、平間亮輔 文化財教諭 今野秀治、早川潤一、藤田雄介 整備活用係 主任 平間亮輔 仙台城史跡調査室 主事 鈴木隆

## 2. 調査経過

今回の調査は太白区向山四丁目94-3, 4において、4階建て共同住宅建設工事に伴い実施されたものである。建築主で、土地所有者の渡邊英夫氏より、平成18年7月11日付けで、「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたため、試掘調査の実施と既存擁壁の取り壊し時の立会いを指示した。現状は崩壊した崖地と古い住宅地の擁壁で覆われた斜面地で、大きく切り土される工事内容であった。

現況の観察から玄室が対角線上に削り取られた1号墓が発見され、発掘調査を実施した。また擁壁の取り壊し時の立会いで、17基の横穴墓が発見されたため、渡邊氏と協議し本調査を実施することとなった。横穴墓の検出された崖地は風化した砂岩が露出し、その分布した範囲のみ横穴墓が掘削されていた。ただ斜面は削平されており、横穴墓の羨道部などの残存は良好ではなかった。

緊急を要した調査であり、現地が不安定な斜面であったため、一般公開は行わず8月17日に報道発表のみ行って野外調査は終了した。



第1図 遺跡位置図

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

大年寺横穴墓群は仙台市街地の南部で、広瀬川南岸の大年寺山北斜面に位置している。調査地点は標高25mから30mの丘陵下部で、尾根状に迫り出した斜面の突端に位置している。大年寺山と愛宕山の間を東に開削したA沢(仮称)と、大年寺山頂部から北に開削したB沢(同)とがあり、これらが合流する端部にある。今回発見された横穴墓は両沢が合流する方向より掘り込まれており、「大年寺層」と呼ばれる砂岩を主とした基盤岩層を掘り込んでいる。A、B沢の合流点付近は現状では、市道と交差点になっている。B沢を挟んで対面する位置には愛宕山横穴墓群の一部(C地点)があり、装飾横穴墓が発見されている。

愛宕山と大年寺山を分ける八沢の南に大年寺横穴墓群、北側に愛宕山横穴墓群(B、C地点)がある。また広瀬川に面する愛宕山北斜面にも愛宕山横穴墓群の一部(A地点)があり、開口した横穴墓を見ることができる。大年寺山を巡るよう今回の調査地点より500m南東に宗禅寺横穴墓群、大年寺山山西斜面には茂ヶ崎横穴墓群、二ツ沢横穴墓群などがある。横穴墓群の分布からは愛宕山の北側、南側斜面、さらに大年寺山の裾を取り巻くように造られたものと考えられる。特にA沢の両岸となる旧地名で「越路」、「大塙谷地」、さらに南に降った「呑澤」と呼ばれた範囲に集中して造られていたと推定される。昭和13年(1938)に「宮城県内の古墳及横穴」—「宮城縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第十二報」—の中で清水東四郎は、現存している横穴墓が34基で、この他にも10基近くは存在していたらしいことを記述している。この中の〔大年寺山愛宕山附近横穴群図〕からは、今回発掘調査された1号墓と2号墓はすでに発見されていたことが窺われる。また昭和25年(1950)に伊東信雄は「仙臺市内の古代遺跡」—「仙臺市史3 別編1」—の中で、愛宕山周辺に「愛宕下切通上古墳」、「大塙谷地古墳」などの円墳が存在していたことを別途資料からの引用をして紹介している。

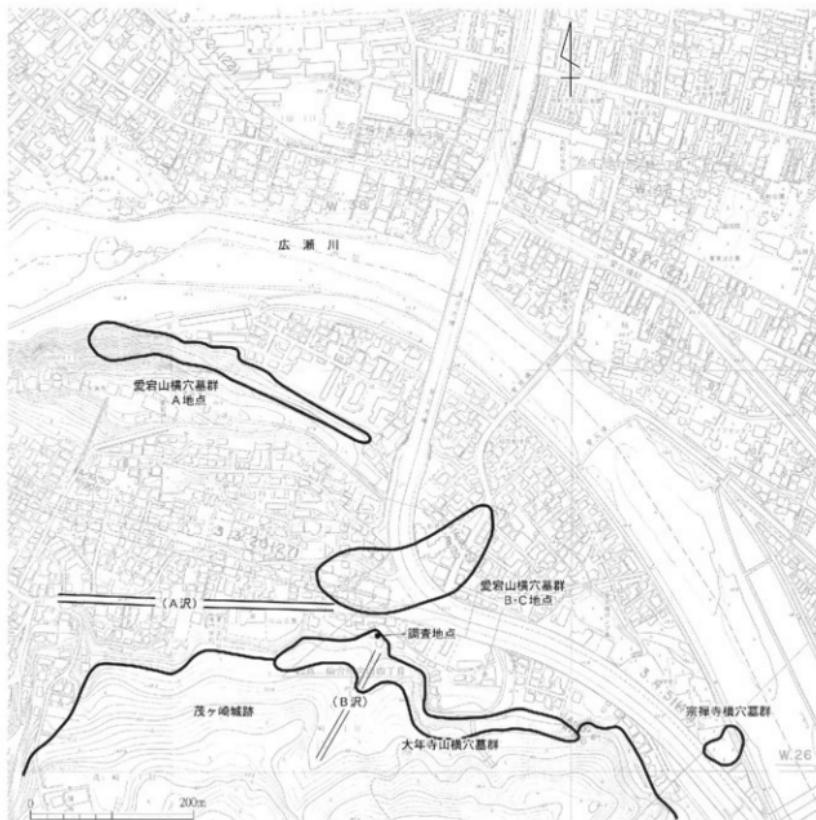
大年寺山の麓から平野部にかけては古墳が点在していた。現在確認されるのは兜塚古墳、金岡八幡古墳、砂押古墳、金洗沢古墳、三神峯古墳群などであるが、以前は一塚古墳、二塚古墳、裏町古墳などのような前方後円墳も存在していた。これらの古墳の中で調査されたものは、古墳時代中期以降のものである。その後、平野部でも遺跡が増加し下ノ内浦遺跡や泉崎浦遺跡では堅穴住居跡や、富沢遺跡では水田跡が発見され、生活の痕跡が見出される。後期になると長町駅東遺跡などで堅穴住居跡が数多く発見されている。ここは溝や材木列、一本柱列などの遮蔽によって区画されており、一般的な集落とは様相を異にしている。この集落よりやや遅れて西に隣接して都山遺跡のⅡ期官衙が造られるようになる。後のⅠ期官衙を含め、大年寺山周辺の横穴墓群との関連が注目されている。

### 2. 周辺での横穴墓の調査から

大年寺山横穴墓をはじめとする大年寺山周辺の横穴墓を向山横穴墓群と総称することがある。大年寺山横穴墓群、愛宕山横穴墓群、宗禅寺横穴墓群、茂ヶ崎横穴墓群、二ツ沢横穴墓群などである。これらの横穴墓群について概要を述べておく。

今回の調査が行われた大年寺山横穴墓群は、昭和62年(1987)と平成元年(1989)に宮城県教育委員会等によって発掘調査が行われている。調査地点は今回の調査の行われた所より東に100m寄った地点で、26基の横穴墓が調査されている。今回の調査と同様に奥壁に台床を持つもの(第11号横穴)などが含まれている。しかし馬具の出土した横穴墓(第4、10号)や装飾横穴墓(第11号)が含まれていた。また複数の木製櫛が玄室内に並べられているもの(第6号)や銅鏡の出土した横穴墓(第18号)などがあった。

愛宕山横穴墓群は大年寺山横穴墓群とA沢を挟んで対面するB、C地点において、これまで3次の調査が実施されている。昭和48年(1973)の仙台市教育委員会の調査(第1次)では9基の横穴墓が調査され、人骨や須恵器長頭壺(第1号壺)が出土したが、ほとんどは削平されており残存状況は悪かった。昭和51年(1976)に道路工事中に



第2図 大年寺横穴墓群周辺図

偶然発見されたC地点（第2次）では、玄室奥壁に赤色顔料で円文と平行線、円文と十字またはT字の組み合わせの文様が描かれた、装飾横穴墓を含む2基が発見された。装飾横穴墓は玄室が家型（宝形造り）で、人骨5体分と刀子が出土した。また羨道から土師器壺が1点出土している。なおこの調査の際に、広瀬川に面したA地点の2基の横穴墓の測量が行われ、報告書に掲載されている。平成3年（1991）の調査（第3次）では18基が調査されたが、その中には、改築され玄室幅3.3mに及ぶ横穴墓（第11号）も含まれていた。各横穴墓の形態・構造に多様性があり、横穴墓を造営した集団の違いに起因する可能性が指摘されている。

宗禪寺横穴墓群は昭和50年（1975）に仙台市教育委員会により15基の横穴墓のうち、14基が調査された。羨道の途中から残っているものが多く、遺構の残存状況が比較的良好な状態にあった。西側の1～5号墳、8号墳では台床を有している。出土した遺物も須恵器の長頸壺や長頸瓶、横瓶、平瓶、提瓶や、土師器壺などがあり、4号墳、5号墳、7号墳、14号墳などからまとめて出土している。出土した土師器壺類は羨道や前庭からで、器形や法量の特徴からは8世紀前半の年代と考えられる。

これまで述べてきた横穴墓は大年寺山や愛宕山の標高20m～35mの範囲に造られていたが、大年寺山の西側の標高50m～70mの急斜面に茂ヶ崎横穴墓群がある。この横穴墓群は昭和63年（1988）に仙台市教育委員会により25基の調査が行われた。玄室内が石敷のものが10基あり、台床のあるものは発見されていない。これらの横穴墓からは鉄劍（1、18号墓）や直刀（7、12号墓）などの武器を出土するもの、耳環や玉類（4号墓）などの装身具を出土するもの、両者（8、24号墓）を出土するものなどがある。円の飾り金具や土器類の出土も多く、土師器の特徴からは郡山連跡のⅠ期官衙やⅡ期官衙との関連が考えられている。

二ツ沢横穴墓群については発掘調査が行われておらず、詳細は明らかになっていない。茂ヶ崎横穴墓群より1.5km程西に離れた地点に土手内横穴墓群がある。ここは大年寺、愛宕山に続く青葉山丘陵の一部にあたる。平成元年（1989）の調査（B地点）では8基が確認され、台床を有するものが4基含まれていた。構築年代の上限は7世紀中葉頃で、使用年代の下限は8世紀第2四半期とされている。

### III 調査の方法

今回の調査地点は大年寺山横穴墓群の北端（範囲拡大による）に位置している。共同住宅建築工事とそれに伴う切り土工事箇所から、横穴墓が発見されたため本調査に至った。現地は玉石積みの擁壁による古い宅地で、この擁壁を撤去しながら遺構確認を行った。急傾斜地であったが、連続して崖地一面に横穴墓が17基検出された。

1号墓以外の横穴墓は、羨道や玄室を削平され旧住宅の擁壁に覆われていたため、ほとんど土砂が堆積していない状況であった。昭和51年の愛宕山装飾横穴古墳（愛宕山横穴墓群C地点）の調査時には、今回の調査地点に住宅の建っていることが確認される（写真1）。その後住宅が解体され荒地の状態になっていたと考えられる（写真2）。

擁壁を撤去工事中に発見され、着工も迫っていたため、緊急に職員を召集し遺構確認を行った。また本調査についても終了する8月後半まで連続して行った。横穴墓のうち6号墓と7号墓には、閉塞石があったが、その他は開口していたか既に削平されていた。各横穴墓の平、断面図による記録化は、玄門付近のみ写真実測の手法を取り入れたが、基本的には1/20で（手）実測した。そのうち6号墓、7号墓からは人骨が出土したため、1/10で補足の実測を行っている。石室や遺物、人骨の出土状況については、随時写真撮影を行った。なお表面上発見されにくい玉類などの微小な遺物を見逃さないように、玄室床面上の堆積土を採取し、土壤洗浄作業の対象とした。

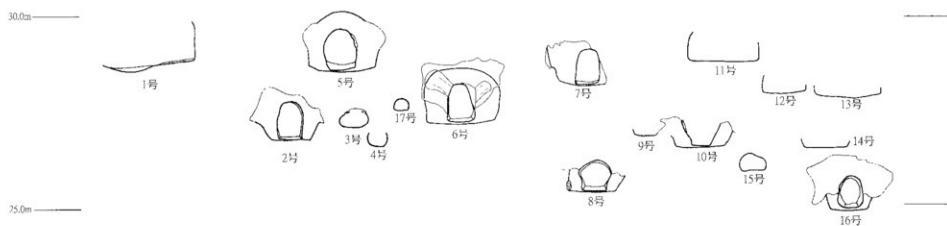
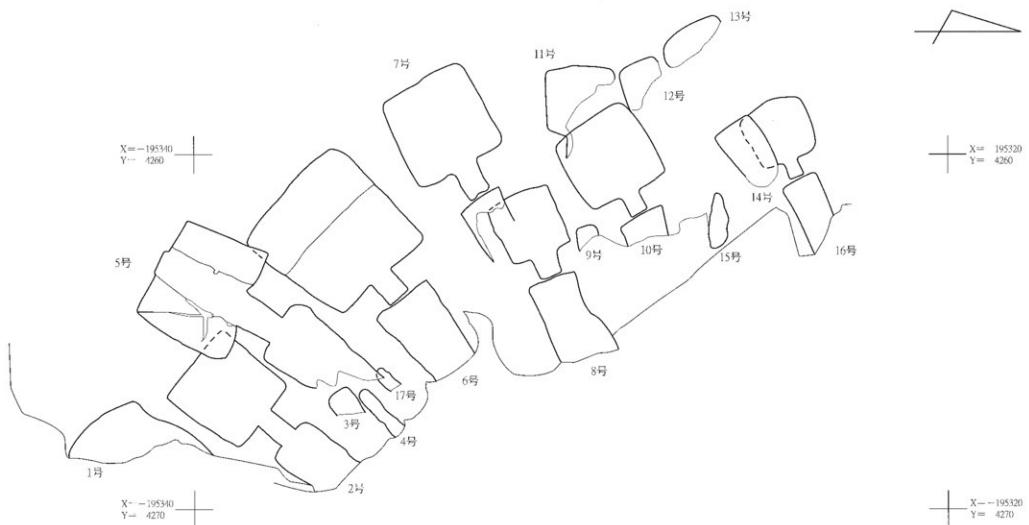
また野外調査終了後に横穴墓の平面配置図、立面模式図の作成を行った。出土した人骨については、詳細を明らかにするため国立科学博物館坂上和弘氏に協力を依頼し、分析、鑑定を行っていただいた。報告書の作成に当たっては、トレース、図版作成、遺物写真撮影などの作業を進める際に迅速化に努めた。



写真1 昭和51年当時



写真2 平成18年 調査前



第3図 調査区全体図

0 50

## IV 発見された遺構と遺物

横穴墓の検出された崖地は風化した砂岩で、その分布した範囲にのみ横穴墓が掘削されている。ただし斜面は削平されており、斜面の北部（第9～15号横穴墓）ほどその度合いが著しい。

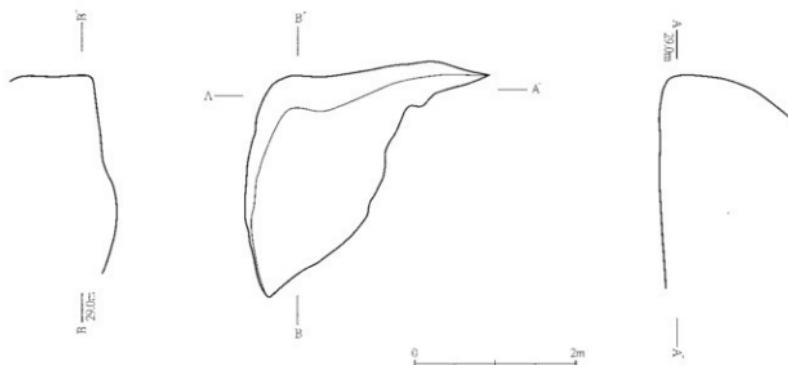
横穴墓は17基検出され、そのうち5基は小形のものである。羨道部はほとんど残らず、玄門や天井部はあるものも第6号横穴墓と第7号横穴墓以外は既に開口していた。

### 【第1号横穴墓】

調査区の南端にあり、玄室床面の標高は28.85mである。現在の道路により大きく削平され、玄室の1/2を残すのみである。斜面上方からの草木に覆われていた。

【玄室】 平面形は長方形と推定されるが、露出していたため風化が著しく、玄室内の形状が丸みを帯びている。地形や他の横穴墓の形状から奥壁は2.7m、奥行2.75m以上、高さ1.6m以上で、天井部などの立面部体は不明である。

【出土遺物】 玄室内からの出土遺物はなかったが、直下の斜面崩壊土中から須恵器E-1長頸壺の底部片（第23図2）が出土している。



第4図 第1号横穴墓実測図

### 【第2号横穴墓】

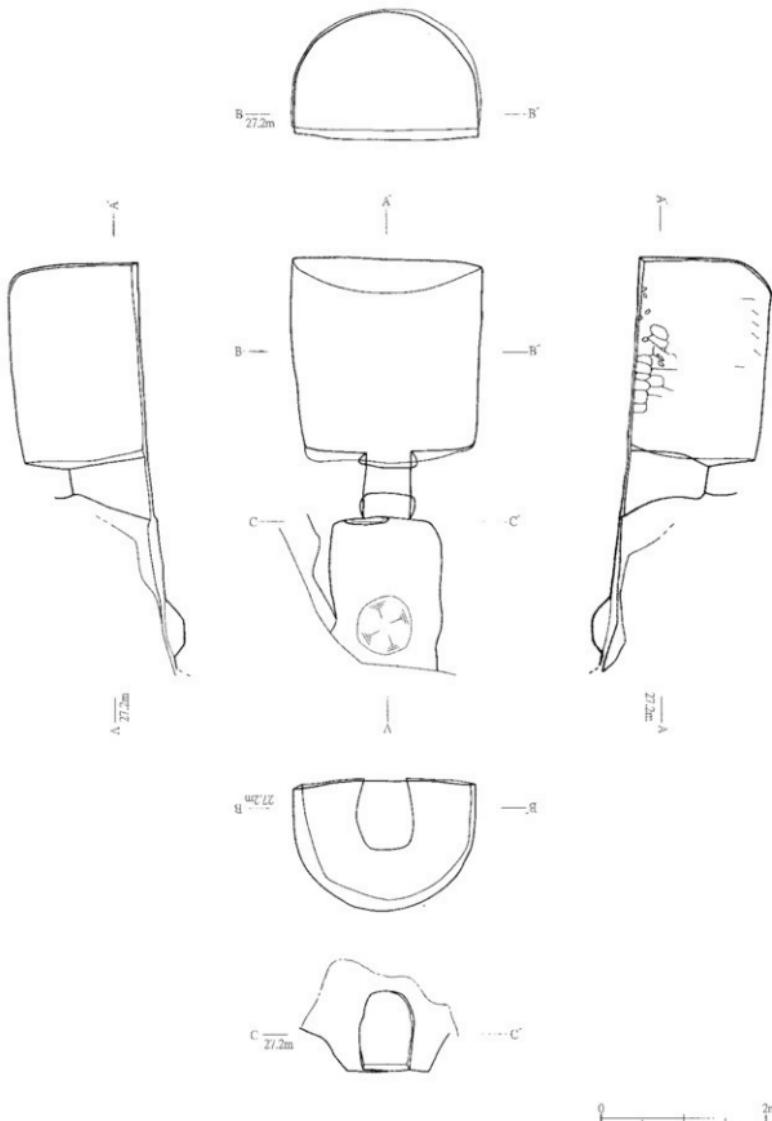
調査区の南端下方にあり、玄室床面の標高は26.82～26.95mである。削平されているが、羨道の途中から玄室にかけて残存する。斜面の崩壊土により覆われていたが、玄室内に電球などが投棄されていたことから一時期開口していたと考えられる。

【玄室】 平面形はほぼ長方形で、幅2.1～2.27m、奥行2.3m、高さ1.7mのアーチ形である。中軸線の方向はS-38°-Wである。床は全体に玄門に向かって緩やかに傾斜している。側壁の下方には成形に伴う工具痕跡が見られる。

【玄門】 玄室正面の中央と羨道奥の中央に位置し、幅0.53～0.57m、奥行0.78m、高さ0.97mである。

【羨道】 幅1.32m、奥行1.8mを検出しているが、羨道の先端部は削平されている。

【出土遺物】 玄室内から横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。



第5図 第2号横穴墓実測図

### 【第3号横穴墓】

調査区の南端下方にあり、玄室床面の標高は27.05mである。削平され玄室の一部が残存する。

【玄室】 平面形は不明である。残存している幅は0.67~0.75m、奥行0.82m、高さ0.38mである。中軸線の方向はおむねS-51°-Wである。

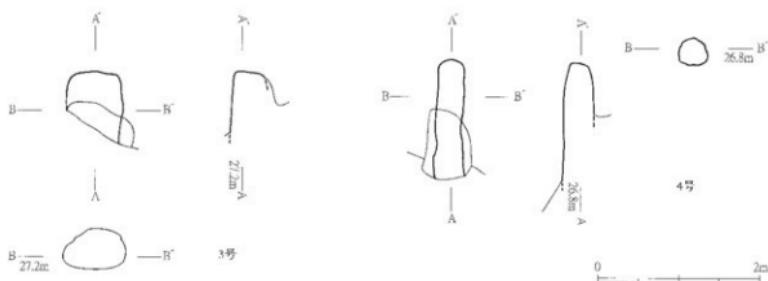
【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

### 【第4号横穴墓】

調査区の南端下方にあり、玄室床面の標高は26.66mである。削平され玄門は残らないが、細長い玄室が残存する。

【玄室】 平面形は細長い袋状を呈する。残存している幅は0.31~0.37m、奥行1.47m、高さ0.36mである。中軸線の方向はおむねS-45°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土しなかったが、人骨の一部が出土した。



第6図 第3号、第4号横穴墓実測図

### 【第5号横穴墓】

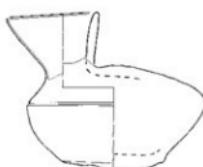
調査区の南端上方にあり、玄室床面の標高は26.2~26.5mである。羨道の一部と玄門、玄室が残存している。閉塞石等はなく口開していたが、玄門前には一辺20~30cmの河原石が2石程列をなして重なり、玄門の高さ3/4以上砂が堆積していた。

【玄室】 平面形はやや歪んだ方形で、幅2.7~3.0m、奥行2.27~2.6m、高さ1.83mのドーム形である。中軸線の方向はS-30°-Wである。床面には左右に台床施設があり、床面よりの高さは45~60cmである。台床は玄門と奥壁の間が側壁に平行するように、幅6~9cmで台床より5cm高くなり、縁を有するような形状をしている。床は全体に玄門に向かって緩やかに傾斜している。四方の壁と天井に複数の工具痕跡が見られる。

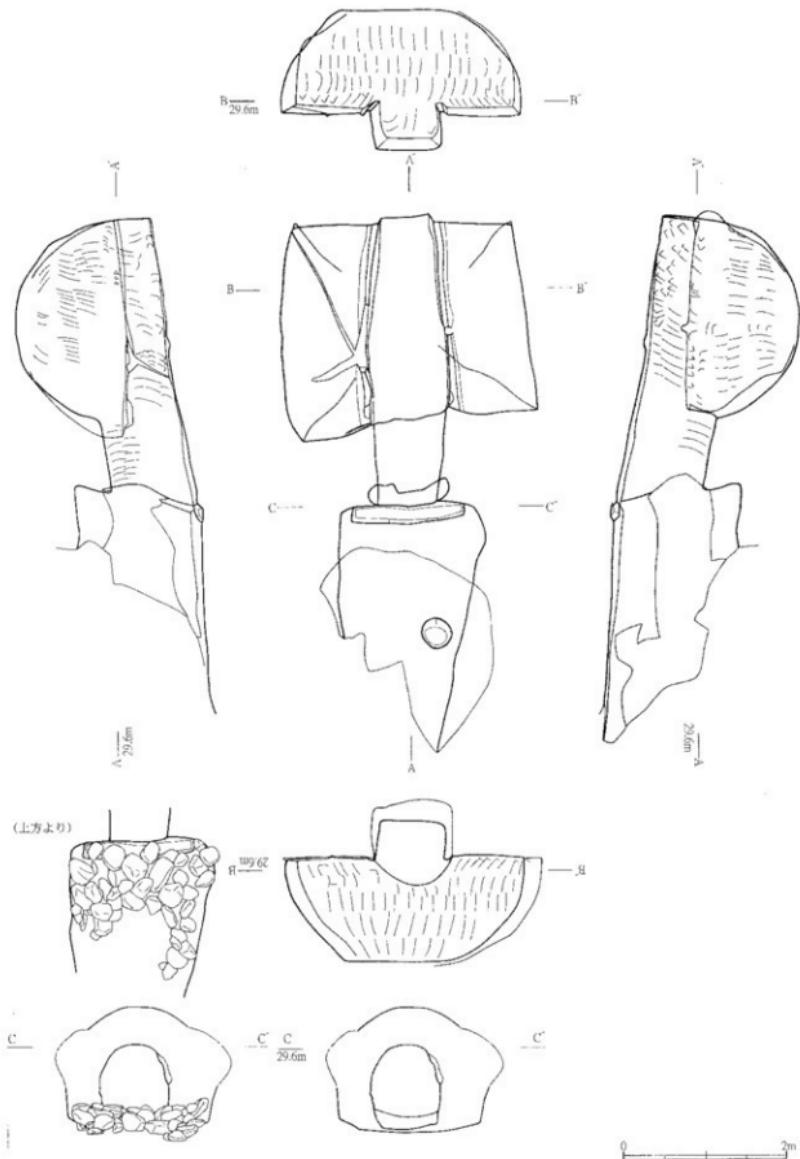
【玄門】 玄室正面の中央と羨道奥の中央に位置し、幅0.7~0.85m、奥行1.1m、高さ1.0mである。羨道側に長さ1.4m、幅0.22m、深さ10cmの溝跡がある。

【羨道】 幅1.45~1.75m、奥行3.05mを検出しているが、羨道の先端部は削平されている。

【出土遺物】 羨道内の底面から、肩部に自然釉がかかり、黒く焼きしまった須恵器E-2平瓶(第7図)が出土した。平瓶は肩部と体部の境に沈線が巡らされ、底部は粗雑な手持ちヘラケズリが施されている。



第7図 第5号横穴墓出土遺物



第8図 第5号横穴墓実測図

### 【第6号横穴墓】

調査区のほぼ中央、中程にあり、玄室床面の標高は26.35mである。羨道の一部と玄門、玄室が残存している。玄門前には河原石が2石程列をなして重なり、その上に板石が2枚立てられていたが、うち1枚が横倒しにされていた。また横穴墓の上方が宅地となっていたため、地盤のボーリング調査の際に石室内に貫通孔が開いた状況になっていた。

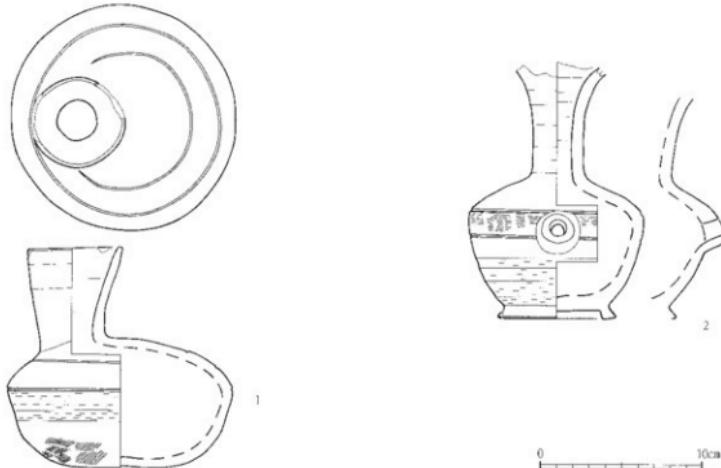
【玄室】 平面形は方形で、幅2.95～3.45m、奥行3.2～3.35m、高さ2mのドーム形である。中軸線の方向はS-42°～Wである。床面には奥壁に沿って無縫の台床があり、高さは床面から15～20cmで平坦である。この上面から人骨4体分(鉢1)が出土している。頭骨が北に向き、さらに側壁との間に鉄刀が4本(A～D刀)置かれていた。台床の縁に沿った左側壁際の天井部にはL字形の金具(N-1)が打ち込まれている箇所がある。同じく台床の縁に沿った右側壁際の大井部にも金具の打ち込まれた痕跡があり、直下の床面に破砕した金具(N-2, 3)が出土している。よって同様の金具が、天井部に対を成して打ち込まれていたものと考えられる。四方の壁と天井に複数の工具痕跡が見られる。

【玄門】 玄室正面の中央と羨道奥の中央に位置し、幅0.8m、奥行0.75m、高さ0.97～1.0mである。玄室から羨道にむかひ10cmの段差になり下がっている。

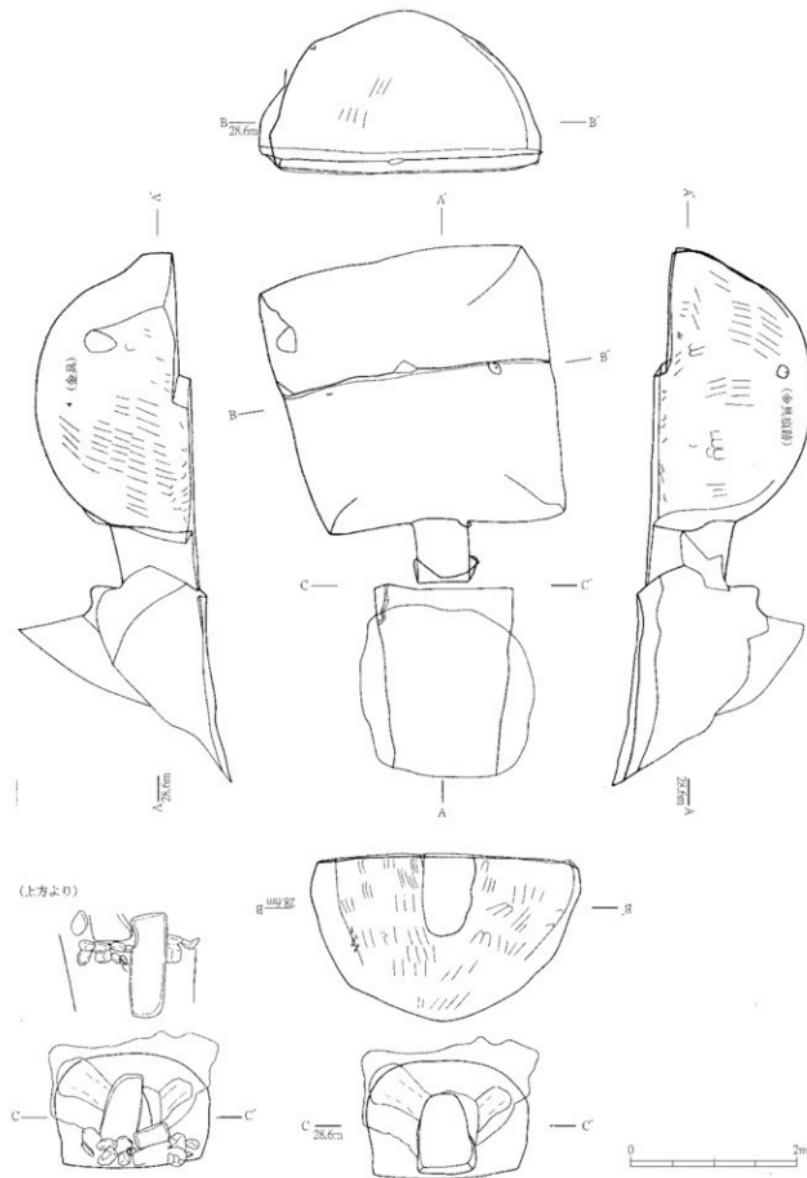
玄門前には一辺20～30cmの河原石が2石程列をなして重なり、元末はその上に長さ125cm、幅50cm、厚さ12～20cmの2枚の板石が立てられていたようである。調査時には右側の板石が倒れた状況であった。

【羨道】 幅1.25～1.7m、奥行2.3mを検出しているが、羨道の先端部は削平されている。羨道の方向は玄室の中軸線とはややすれがあり、S-51°～Wである。

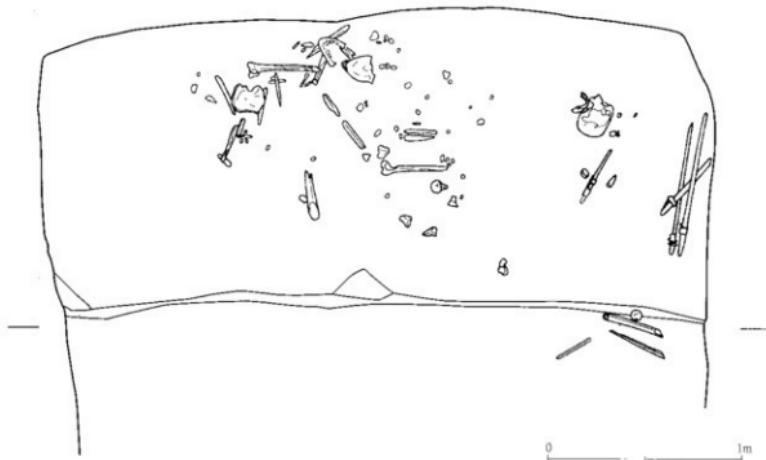
【出土遺物】 羨道内に積まれた河原石と共に須恵器E-3平瓶(第9図1)とE-4甌(第9図2)が出土した。須恵器E-3平瓶は天井部に二重の沈線が弧を成すように入れられ、底部を手持ちヘラケズリされている。体部の下半には平行タタキによる成形の痕跡が薄く見られる箇所がある。E-4甌は肩部の下に沈線による区画があり、その中に8条の粗い波状文が入れられている。体部の下半は回転ヘラケズリが施され、底部の切り離し技法も明らかではない。



第9図 第6号横穴墓出土遺物(羨道)



第10図 第6号横穴墓実測図



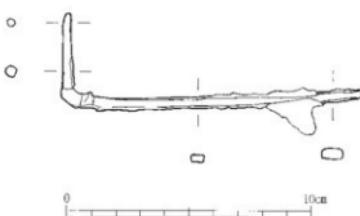
第11図 石室内人骨出土状況

玄室の天井部側壁中に打ち込まれていたL字形のN-1金具(第12図)は、長さ12cm、L字に曲がり先端まで3.5cmのものである。台床より出土した4本の鉄刀のうち、A刀(第13図1)は長さ73.7cmの直刀で、刀身は平造、元幅2.7cm、切先はフクラ切先である。茎先端は平坦で、目釘孔が1ヶ穿いている。ハバキと喰み出し舞が鋲びて付着している。刀身側に銅製の幅の縁い環が付いている。茎、刀身の各所に木質の残欠が見られる。

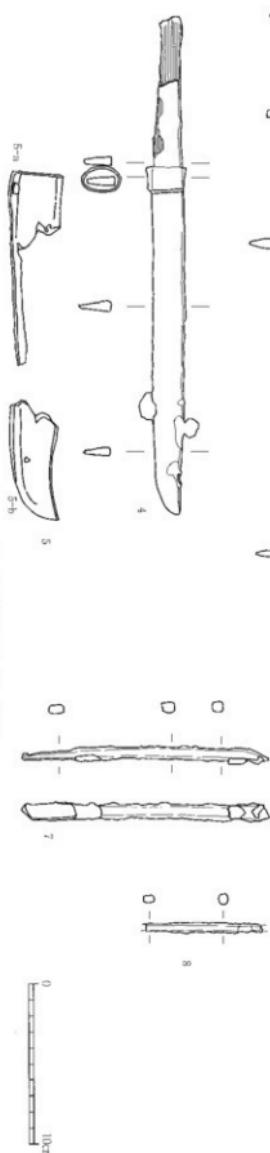
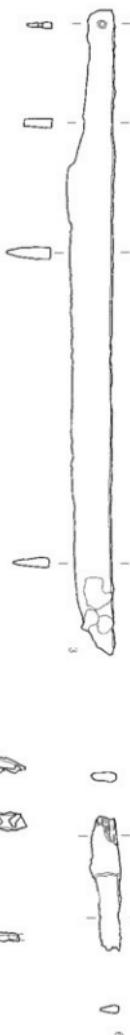
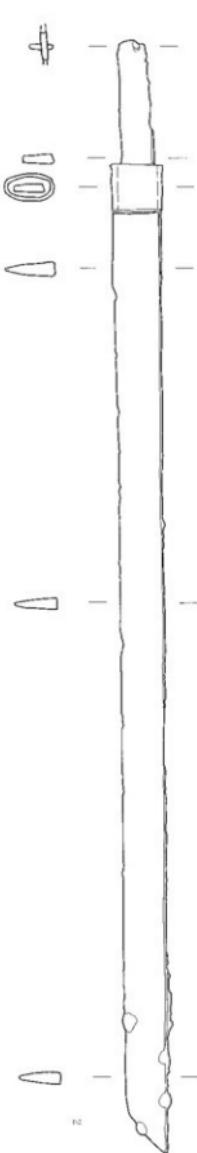
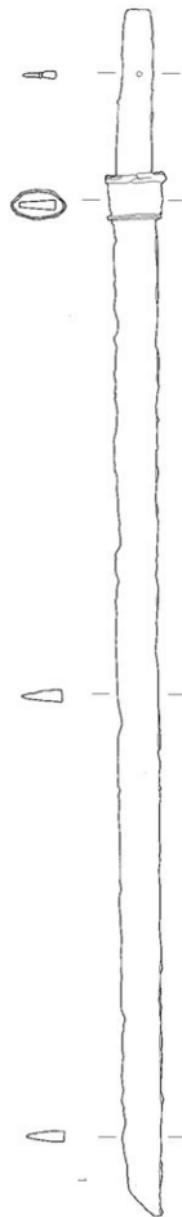
B刀(第13図2)は長さ68.4cmの直刀で、刀身は平造、元幅3cm、切先はカマス切先である。茎先端はやや朽ちており、目釘孔に口釘(N-5)が付いた状態である。銅製と見られるハバキが付着している。ハバキに接するようリング状の喰み出し舞(N-8)と把緒金具(N-9)が重なって出土した。これらの金具はメッキが付着している。

C刀(第13図3)は長さ39.6cmの直刀で、刀身は平造、元幅2.8cm、切先はフクラ切先である。茎先端は下方に丸味があり、口釘孔が1ヶ穿いている。出土した時は内側に木質の付着した銅製のハバキ(N-10)が付いていた。

D刀(第13図4)は長さ30.7cmの直刀で、刀身は平造、元幅1.8cm、切先はやや丸味のあるフクラ切先である。茎先端は平坦で、銅製のハバキが刀身の鈴で付着して残っている。木質が若干残っている。D刀に出土時にN-6鞘口金具(第13図5-a)が刀身に付いており、やや離れてN-7鞘尻金具(第13図5-b)も出土した。伴に銅製で部分的に赤色あるいは赤褐色になっている。塗布されたものなのか、刀身の鈴による影響なのかは明らかではない。鞘口金具は刀身部に長さ8cm程の尾状の受けが延びている。棟の部分に向かってウロコ状の装飾が二重に付いている。茎に近い部分に貫通口があり、鞘を固定していたと考えられる。鞘尻金具は先端が反り返り、片方にのみ孔があり針孔であったと考えられる。鞘口金具と同様にウロコ状の装飾が二重に付いている。また玄室床面から、長さ8cm程のN-4刀子(第13図6)の残欠が出土している。



第12図 石室内出土金具



第13图 第6号椭穴墓石室内出土遗物

【第7号横穴墓】

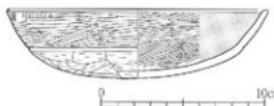
調査区中央の上方にあり、玄室床面の標高は28.3~28.4mである。工事中に発見されたため玄室の一部が削平され、玄門の閉塞石が失われている。現状では羨道の途中から玄室にかけて残存する。

【玄室】 平面形はほぼ長方形で、幅2.35~2.55m、奥行2.5m、高さ1.55mのドーム形である。中軸線の方向はS-60°-Wである。四方の壁と天井に工具痕跡が見られる。床面上より人骨が8体分出土している（註2）。

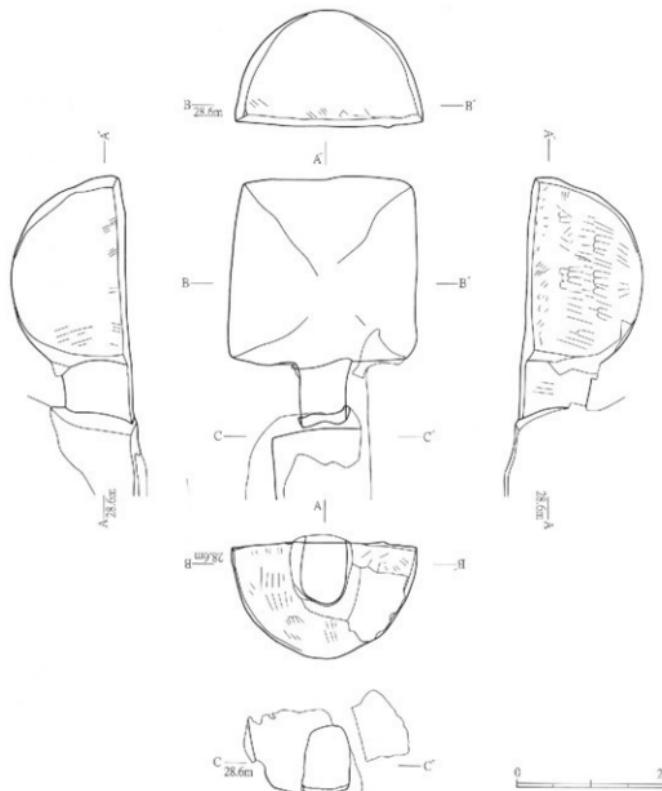
【玄門】 玄室正面の中央と羨道奥の中央に位置し、幅0.6~0.7m、奥行0.75m、高さ0.83~0.9mである。閉塞石の内側に土器C-1（第14図）が伏せられるように置かれていた。

【羨道】 幅1.2m以上、奥行0.82mを検出しているが、羨道の大部分は削平されている。

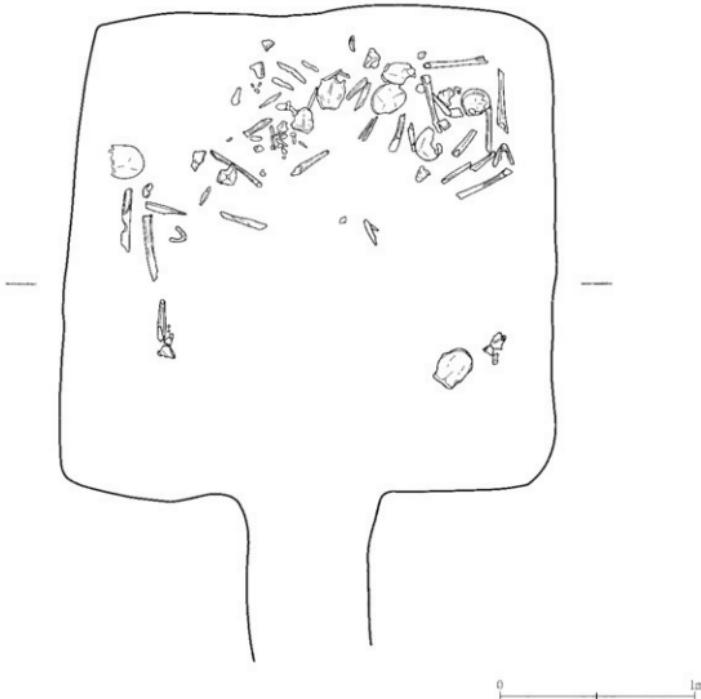
【出土遺物】 玄門の内側から出土した土器C-1（第14図）は内面黒色処理され、外面は底部と体部の境に緩い段を有し、丸底のものである。



第14図 第7号横穴墓出土遺物



第15図 第7号横穴墓実測図



第16図 第7号横穴墓石室内人骨出土状況

#### 【第8号横穴墓】

調査区中央の下方にあり、玄室床面の標高は25.4mである。削平されているが、羨道の途中から玄室にかけて残存する。斜面の崩壊土により覆われていた。側壁と天井に工具痕跡が見られる。

【玄室】 平面形はほぼ長方形で、幅1.62~1.72m、奥行1.7m、高さ1.14mのドーム形である。中軸線の方向はS-66°-Wである。

【玄門】 玄室正面の中央と羨道奥の中央に位置し、幅0.57~0.87m、奥行0.6m、高さ0.8mである。

【羨道】 幅1.15~1.5m、奥行2.25mを検出しているが、羨道の先端部は削平されている。

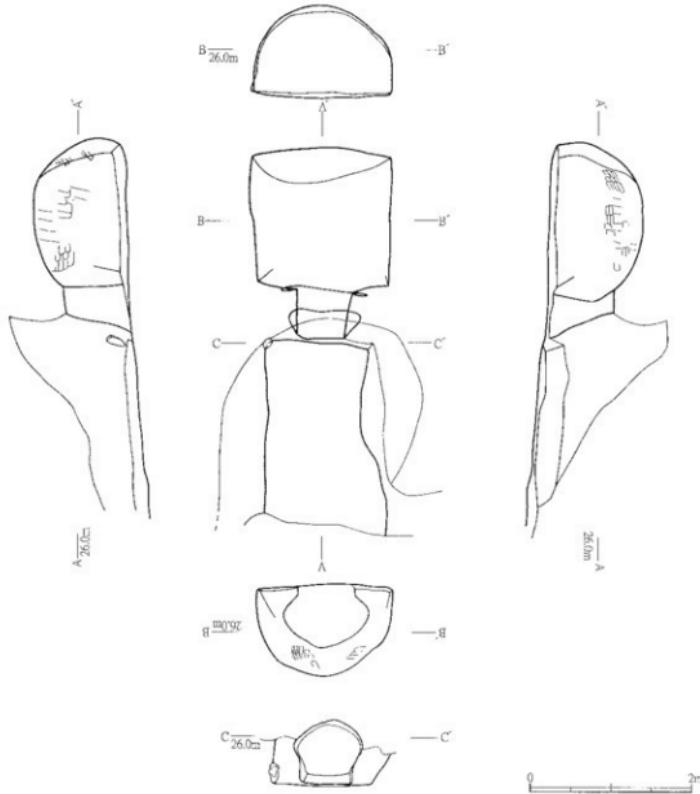
【出土遺物】 玄室内から横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。

#### 【第9号横穴墓】

調査区の北側中程にあり、玄室床面の標高は26.83~26.9mである。著しく削平された玄室奥の一部のみが残存する。

【玄室】 平面形は不明である。残存している幅は0.55m、奥行0.57m、高さ0.33m以上である。中軸線の方向はおむねS-77°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。



第17図 第8号横穴墓実測図

【第10号横穴墓】

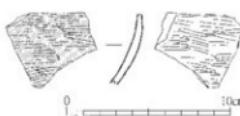
調査区の北側中程にあり、玄室床面の標高は26.6mである。削平され天井部の失われた羨道の途中から玄室にかけて残存する。

【玄室】 平面形はほぼ正方形で、幅2.32m、奥行2.27m、高さ1.5m以上である。中軸線の方向はおむねS-59°-Wである。

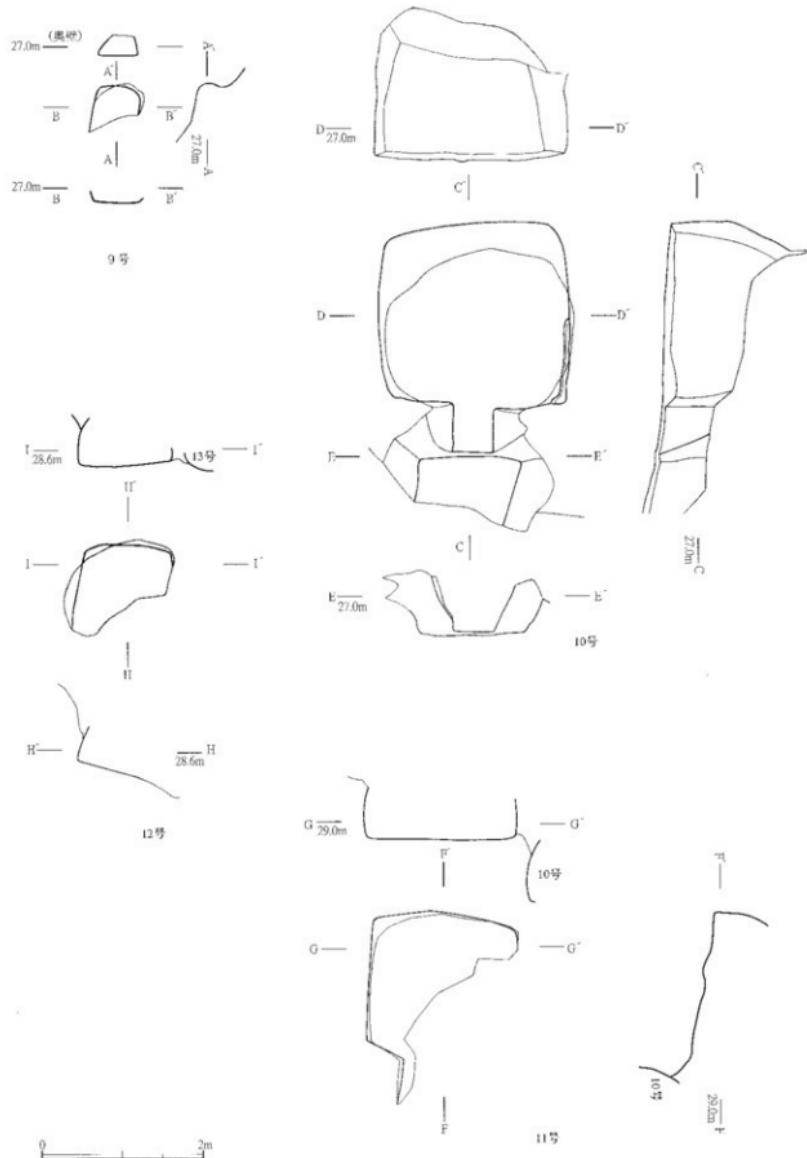
【玄門】 玄室正面の中央と羨道奥の中央に位置しているが、上半部が失われている。幅0.48m、奥行0.52~0.6m、高さ0.57m以上である。

【羨道】 幅1.14~1.23m、奥行0.8m以上を検出しているが、羨道のほとんどは削平されている。

【出土遺物】 玄室内の床面から上鏡器C-2环(第18図)の破片が出土している。环は内面黒色処理され、内外面ヘラミガキが施されている。



第18図 第10号横穴墓出土遺物



第19図 第9号、第10号、第11号、第12号横穴墓実測図

#### 【第11号横穴墓】

調査区の北側上方にあり、玄室床面の標高は28.82~29.07mである。削平され天井部の失われた狭道の途中から玄室の1/2程が残存する。

【玄室】 平面形の詳細は不明である。幅1.8m程、奥行1.53~1.8m、高さ0.62m以上である。中軸線の方向はおおむねS-86°-Wである。

【玄門・狭道】 削平されほとんどが失われている。

【出土遺物】 横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。

#### 【第12号横穴墓】

調査区の北端上方にあり、玄室床面の標高は28.25~28.47mである。削平され天井部の失われた玄室の一部が残存する。

【玄室】 平面形の詳細は不明である。幅1.12m程、奥行1.1m以上、高さ0.4m以上である。中軸線の方向はおおむねS-70°-Wである。

【出土遺物】 横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。

#### 【第13号横穴墓】

調査区の北端上方にあり、玄室床面の標高は23.23~23.5mである。削平され天井部の失われた玄室の一部が残存する。

【玄室】 平面形の詳細は不明である。幅1.7m程、奥行0.75m以上、高さ0.12m以上である。

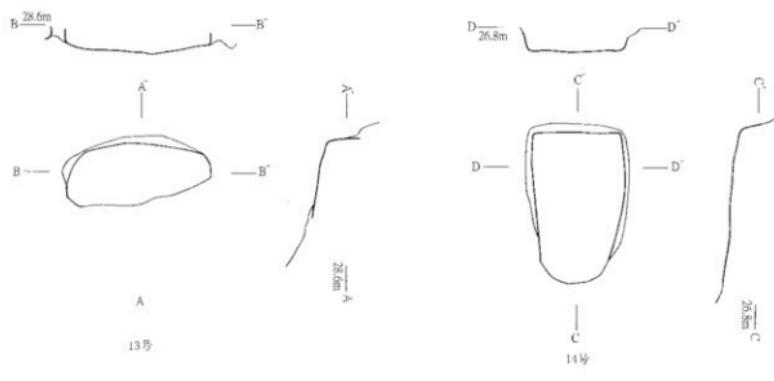
【出土遺物】 横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。

#### 【第14号横穴墓】

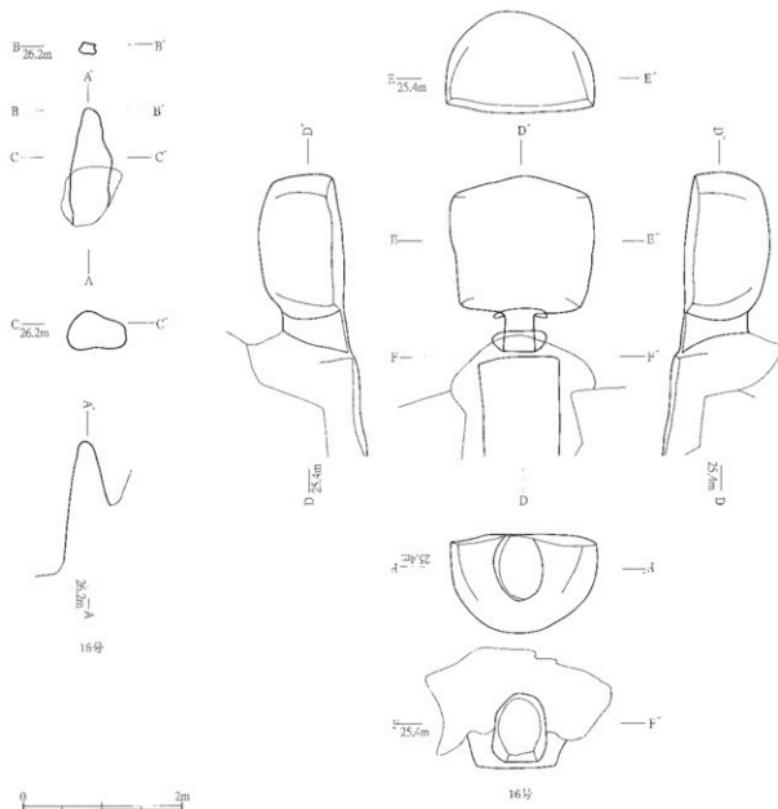
調査区の北端上方にあり、玄室床面の標高は26.43~26.58mである。削平され天井部の失われた玄室の一部が残存する。

【玄室】 平面形は長方形と推定される。幅0.87~1.12m程、奥行1.55m以上、高さ0.22m以上である。中軸線の方向はおおむねS-53°-Wである。

【出土遺物】 横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。



第20図 第13号、第14号横穴墓実測図



第21図 第15号、第16号横穴墓実測図

#### 【第15号横穴墓】

調査区の南端下方にあり、玄室床面の標高は25.9~26.08mである。削平され玄門は残らないが、細長い玄室が残存する。

【玄室】 平面形は細長い棒状を呈する。残存している幅は0.23~0.5m、奥行1.45m、高さ0.5mである。中軸線の方向はおおむね S 87° - Wである。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

#### 【第16号横穴墓】

調査区の北端下方にあり、玄室床面の標高は24.95~25.1mである。削平されているが、狭道の途中から玄室にかけて残存する。斜面の崩壊土により覆われていた。

【玄室】 平面形は歪んだ長方形で、幅1.55~1.72m、奥行1.45~1.65m、高さ1.2mのアーチ形である。中軸線の方向は S 65° - Wである。

【玄門】 玄室正面の中央と羨道奥の中央に位置し、幅0.65m、奥行0.54m、高さ0.8~0.84mである。

【羨道】 幅0.35m、奥行0.45mを検出しているが、羨道の先端部は削平されている。

【出土遺物】 玄室内から横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。

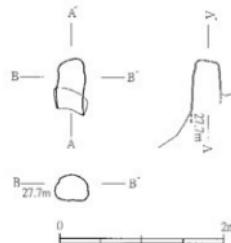
#### 【第17号横穴墓】

調査区の南端下方にあり、玄室床面の標高は25.2mである。削平され玄室の一部が残存する。

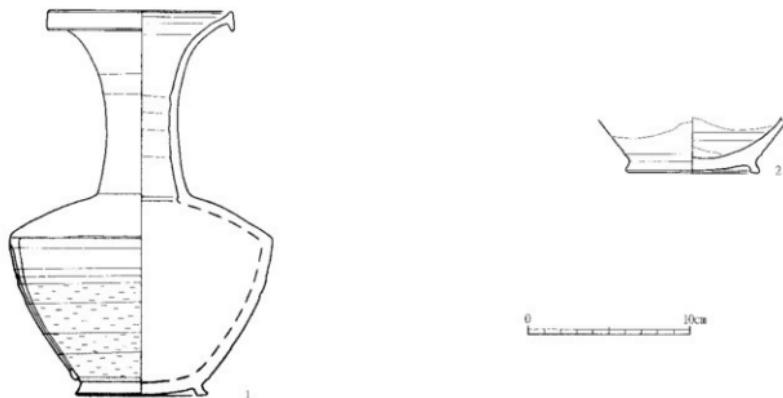
【玄室】 平面形は不明である。残存している幅は0.32m、奥行0.67m以上、高さ0.34mである。中軸線の方向はおむねS-41°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

この他に3号、4号、5号墓下方の斜面崩壊土中から須恵器E-5長頸壺（第23図1）が出土した。肩部の稜線が明顯で、頸部が弓なりに細くなっている。底部には回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。上方より緑色の釉がかかり、胎土中に黒色の粒子を多く含んでいる。



第22図 第17号横穴墓実測図



第23図 出土遺物

## V まとめ

### 1. 横穴墓

横穴墓は17基検出され、そのうち5基は棒状の小形の形状である。これらの横穴墓のうち人骨を出土したのは第4号、第6号、第7号墓である。玄室内に台床などの施設を有するものは第5号、第6号墓のみで、他はほぼ平坦な床面となっている。

第5号横穴墓では玄室内壁間に2面の棺座があり、床面から45~60cmほど高くなっている。このような横穴墓は、愛宕山横穴墓群第3次発掘調査においてやや似た形態の横穴墓（第11号）はあるが、床面からの高さが6~8cmと低いものであった。2面の高い棺座を有する例は、県内では山畠横穴墓や追戸横穴墓などに見られるが、大年寺山横穴墓群では検出されていなかった（註3）。

第6号横穴墓は今回の発見された横穴墓の中では最大で、玄室内の平面形が幅3.4m、奥行3.25mのほぼ方形で、高さは2mを測る。玄室内の奥壁側には高さ15~20cmほどの台床がある。このような形態の横穴墓は、宗禅寺横穴5号墳、愛宕山横穴墓群A地点1号墳、2号墳、大年寺山横穴墓第11号横穴・装飾横穴墓（註4）など、周辺の横穴墓でも同じ形態のものが少数発見されている。この横穴墓には玄室内の天井部にL字形のN-1金具（第12図）が打ち込まれていた。形状から吊り金具として使われたものと考えられる。さらに天井部の対称の位置にもその痕跡が残っていたことから、対になって用いられたと考えられる。このような例は横穴墓や横穴式石室を有する古墳の内部で発見されている（註5）。使用された金具の形状には鉤形のものや、杖状のもの、あるいは鉄鍔を使用したものなどがある（註6）。これらの中で、藤ノ木古墳（奈良県斑鳩町）や親音塚古墳（群馬県高崎市）の石室内からは、先端がU字形に曲げられた金具が発見されている（註7）。いずれも直線的に曲げられ、本遺跡のように角張つたし字形を呈したものではない。藤ノ木古墳では打ち込みではなく、石材の間に差し込まれていたと考えられている。また打ち込まれた位置については、台床の縁に沿って天井部の上部に打ち込まれている。このような位置に鉄鍔が打ち込まれた例（註8）もあり、遺体の前面に布などを吊り下げる機能を持ったものと解されている。

日本書紀の履中記の中に室内の寝所の前に「帳」とぱりが張られていたとする記述があり、今回の金具の発見も横穴墓室内に布などを吊り下げる用途のために打ち込まれていたものであろう。

### 2. 葬送

人骨の同定について巻末の坂上和弘氏からの報告で、発掘調査時の目視による個体数より多い個体が埋葬されていることが明らかになった。また人骨のうち体幹骨と言われる部位が出土していないことから、改葬の可能性を指摘されている。改葬という視点からみると、これまでの大年寺山横穴墓群の調査で出土した馬具類や、近傍の茂ヶ崎横穴墓群の下顎の出土と較べて極端に副葬品が少ないと見える。閉塞していた第6号墓、第7号墓の床上の堆積土も採集し、洗浄作業の結果でもその中には副葬品は含まれてはいなかった。よっていずれかの場所で第1次埋葬をして、何らかの基準で骨を選別しての再埋葬の可能性はあり得ると考えられる。確かに駒坂新田横穴墓群（福島県河東町）の調査では、すべての人骨が改葬されているとの見解がある（註9）。しかし第6号墓の台床前の「帳」の存在や鉄刀の出土位置を見る限りでは、伸展葬を想起するほうが自然ではなかろうか。ただし第6号墓で4個体、第7号墓で8個体と言ふ人骨の数からは、數回に分けて埋葬されたことは確かであろう。その際に以前に埋葬されていた人骨や副葬品を整理したことはなかったのだろうか、また最終埋葬者の葬送のあり方まで一貫した埋葬法を維持していたのかなども検討を加えなければならない。残念ながら今回の調査、および大年寺山横穴墓群周辺の調査では横穴墓が開口しているものが多く、かならずしも人骨や遺物の出土状況が良好とは言えないため、今後の注意すべき課題として捕らえておきたい。

### 3. 出土遺物

土師器、須恵器、鉄刀の他に、少量の金属製品が出土している。ここでは出土した土器類について、若干の考察を加えておく。

第5号横穴墓では羨道内の玄門付近より小形の須恵器E-2平瓶が出土している。口縁部が欠損している。焼成がよく、大井部外面に黄灰色の灰がかかっている。南西に2.5kmほど離れた土手内横穴B地点2号横穴墓（以下は土手内2号墓）で出土していると短頸瓶と、胎土や焼成が良く似ている。土手内2号墓では平底瓶になる土師器环と共に出土していることから、8世紀の前半代の中に納まるものと見られ、このE-2平瓶もおむねその頃と考えられる。同様に第6号墓の羨道内の玄門付近から、須恵器E-3平瓶とE-4罐が出土している。いずれも口縁部が欠損している。E-3平瓶については、茂ヶ崎横穴墓群20号墓（以下は茂ヶ崎20号墓）出土の平瓶に似た特徴を見出すことが出来る。茂ヶ崎20号墓からは平瓶が2点出土しているが、E-9の口縁部のつくりや、E-15の体部の最大径の位置などでE-3平瓶に共通する特徴をあげることができる。またE-4罐については口縁部が欠損しているが、大きく聞く形態と見られる。沈線で区画された文様模や口の形態からは、土手内横穴B地点3号横穴墓（以下は土手内3号墓）や袖ヶ沢横穴群（山梨町逢隣）出土の罐と似た器形と考えられる。茂ヶ崎3、20号墓では外側面黒色処理の土師器环や蓋類、平底の碗と共に伴していることから、郡山遺跡II期官衙とほぼ同じ頃の年代を考えられよう（註10）。よって第6号墓の羨道内の玄門付近に、これらの土器が置かれたのもこの時期と考えられる。

第7号墓からは閉塞された玄門内側から土師器C-1壺が伏せたような状況で出土した。この状態では玄門での人の出入りが難しいことから、最終埋葬の段階で置かれた可能性がある。ただし、この土師器の特徴からは7世紀の後半代から8世紀の初めまでの間に収まるとしか言えないと思われる。

この他に斜面の崩壊土中から肩部に釉のかかった長頸壺が2点（E-1、5）出土している。この2点は釉のかかり方や高台の形態、胎土の特徴が共通していることから、同様の形態をしていると想定される。E-5については口縁部が欠損している。なお前述した茂ヶ崎20号墓からも特徴を同じくする長頸壺が出土していた。

このように見てみると土器からは、第5号横穴墓は8世紀の前半代、第6号横穴墓は郡山遺跡II期官衙とほぼ同じ頃の年代の7世紀末から8世紀初め頃、第7号横穴墓は7世紀の後半代から8世紀の初めまでの間に使用されていたとまでしか、現時点では言えないであろう。

### 4. 郡山遺跡との関連

これまで大年寺山横穴墓群を含む周辺の横穴墓群から出土した土器類は、南東2.5kmに位置する郡山遺跡から出土する土器類と類似すると考えられた。しかし今回の調査の中で、胎土や焼成からはやや違いも見出せるようになってしまった。長頸壺や長頸瓶、さらに平瓶の一部は、東海地方の胎土の可能性があり（註11）、遠方からの搬入品と考えたほうが良いと思われる。第5号横穴墓出土の平瓶と瓶は在地産とみられ、郡山遺跡で出土する須恵器類と大きく異なるものではないことである。よって横穴墓に供給される須恵器には搬入ルートが大きく二系統あり、用途、器種により異なっていたものと考えられる。

### 5. その他

今回の調査、整理の中で、大年寺山横穴墓群周辺の横穴墓出土の土器を比較検討したところ、須恵器の長頸壺や平瓶、長頸瓶などの口縁部が欠損しているものが明らかになった。出土点周辺には欠損部の破片がないことから、別所で打ち欠いて持ち込まれている可能性を考えたい。今後の横穴墓の調査でも充分留意すべきであろう。

＜参考文献＞

- 池上 哲「日本の横穴墓」 雄山閣出版 2000  
池上 哲「日本横穴墓の形成と展開」 雄山閣出版 2004  
氏家和典「東北古代史の基礎的研究」 東北プリント 1988  
富田鉢一「横穴の破魔矢」『季刊考古学』第96号 2006  
村田文夫「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集刊行会 1996  
村田文夫「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛・その後」『民俗と考古の世界』  
和田文夫先生頌寿記念献呈論集刊行会 2000  
仙台市文化財調査報告書第8集「愛宕山横穴群発掘調査報告書」 1974  
仙台市文化財調査報告書第9集「宗神寺横穴群発掘調査報告書」 1976  
仙台市文化財調査報告書第55集「愛宕山装飾横穴墳発掘調査報告書」 1985  
仙台市文化財調査報告書第130集「茂ヶ崎横穴墓群発掘調査報告書」 1989  
仙台市文化財調査報告書第165集「土手内-土手内遺跡・土手内窓跡・土手内横穴B地点発掘調査報告書」 1989  
仙台市文化財調査報告書第187集「愛宕山横穴墓群-第3次発掘調査報告書」 1994  
仙台市文化財調査報告書第283集「郡山遺跡発掘調査報告書-総括編(1)」 2006  
宮城県文化財調査報告書第130集「大年寺山横穴墓群」宮城県教育委員会 1990  
志賀泰治「亘理の古墳」 亘理町 1975

註1 発掘調査時には2体分と認識していたが、国立科学博物館 坂上和弘氏の同定により4体分あることが明らかになった。

註2 註1と同様に調査時には5体分と認識していたが、同定により8体分あることが明らかになった。

註3 横穴墓の形態的な特徴から、山陰・出雲地方の横穴墓との関連を指摘する見解がある。

池上 哲「1東国横穴墓の型式と伝播」 p.46 「日本の横穴墓」 雄山閣出版 2000

註4 宮城県文化財調査報告書第130集「大年寺山横穴墓群」宮城県教育委員会 1990

註5 季刊考古学第 96号 2006

註6 村田文夫「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛・その後」『民俗と考古の世界』

和田文夫先生頌寿記念献呈論集刊行会 2000

註7 註4と同じ

註8 物集女車塚古墳（京都府）、尾足横穴墓（熊本県）に存在する。註4による。

註9 池上 哲「日本の横穴墓」 p.135, 136 雄山閣出版（2000）

註10 第65次調査区S I 1121、第107次調査区S X1616出土遺物など。

註11 東松島市教育委員会 佐藤敏幸氏よりE-5長頭壺については、東海地方の胎土と見えるとの見解を頂いた。

# 写 真 図 版

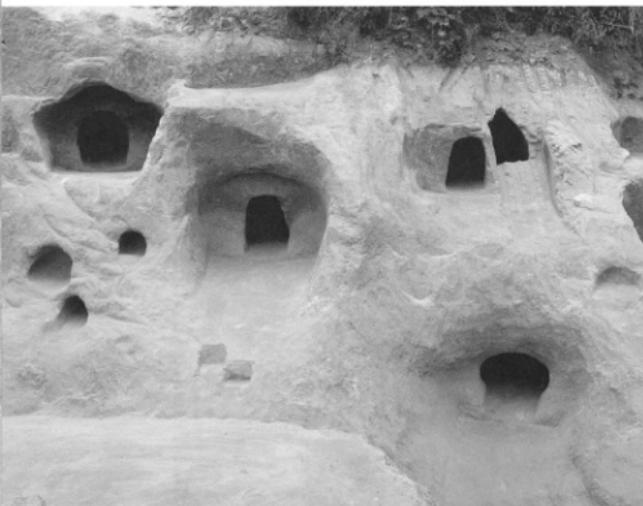




図版1 大年寺山横穴墓群周辺空港写真（昭和27年撮影）



図版 2  
調査区南側



図版 3  
調査区中央



図版 4  
調査区北側



图版5 第1号横穴墓玄室



图版6 第2号横穴墓玄门



图版7 第2号横穴墓玄室东半



图版8 第2号横穴墓玄室西半



图版9 第3号、4号、17号横穴墓



图版10 第4号横穴墓人骨出土状况



图版11 第5号横穴墓远景



图版12 第5号横穴墓玄门



図版13 第5号横穴墓玄門から玄室



図版14 第5号横穴墓玄室左



図版15 第5号横穴墓玄室右



図版16 第5号横穴墓玄室奥壁



図版17 第5号横穴墓出土遺物（E-2）



図版18 第6号横穴墓閉塞状況



図版19 第6号横穴墓玄門遠景



図版20 第6号横穴墓玄室



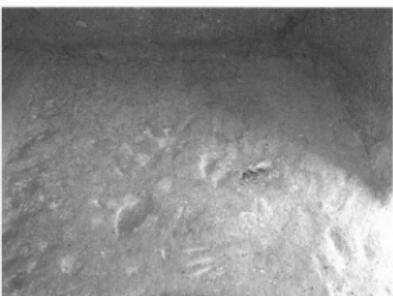
図版21 第6号横穴墓玄室内台床



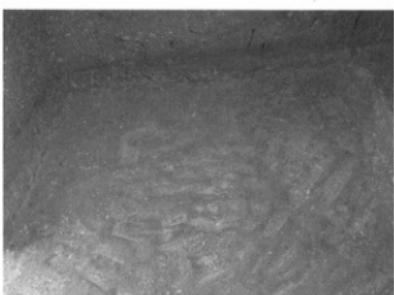
図版22 第6号横穴墓床台北半



図版23 第6号横穴墓床台南半



図版24 第6号横穴墓玄室床面北半



図版25 第6号横穴墓玄室床面南半



図版26 第6号横穴墓玄門－玄室内より－



図版27 第6号横穴墓玄門－羨道側より－



図版28 第6号横穴墓人骨出土状況



图版29 第6号横穴墓床北—遗物出土状况—



图版30 第6号横穴墓直刀出土状况



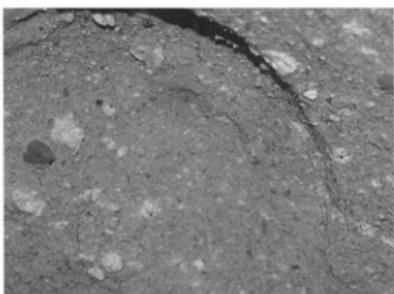
图版31 第6号横穴墓直刀出土状况—A、B、C刀—



图版32 第6号横穴墓直刀出土状况—D刀—



图版33 第6号横穴墓天井部金具(N-1)



图版34 第6号横穴墓天井部金具痕跡



图版35 金具痕跡下出土金具



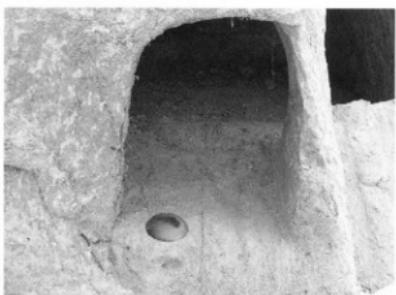
图版36 第6号横穴墓出土遗物(E-4)—美观—



图版37 第6号横穴墓出土遗物（E-3）—盖道—



图版38 第7号横穴墓玄门



图版39 第7号横穴墓玄门内出土遗物（C-1）



图版40 第7号横穴墓人骨出土状况1



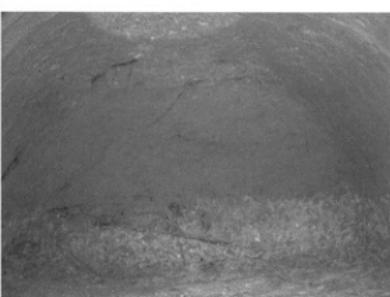
图版41 第7号横穴墓人骨出土状况2



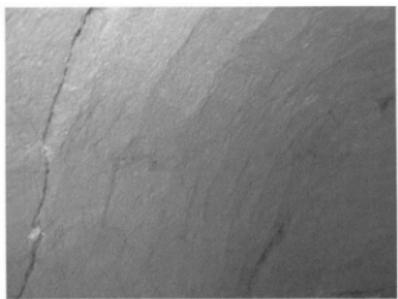
图版42 第7号横穴墓玄室



图版43 第8号横穴墓玄门



图版44 第8号横穴墓玄室



图版45 第8号横穴墓天井部工具痕



图版46 第9号横穴墓



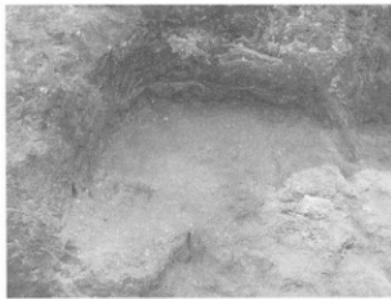
图版47 第10号横穴墓



图版48 第10号横穴墓玄室床面



图版49 第11号横穴墓



图版50 第12号横穴墓



图版51 第13号横穴墓



图版52 第14号横穴墓



図版53 第15号横穴墓



図版54 第16号横穴墓



図版55 第16号横穴墓玄門



図版56 第16号横穴墓玄室



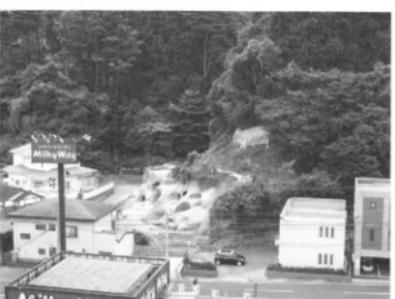
図版57 第3号、4号横穴墓周辺斜面遺物出土状況



図版58 須惠器 E-5 長頸壺



図版59 調査全景写真

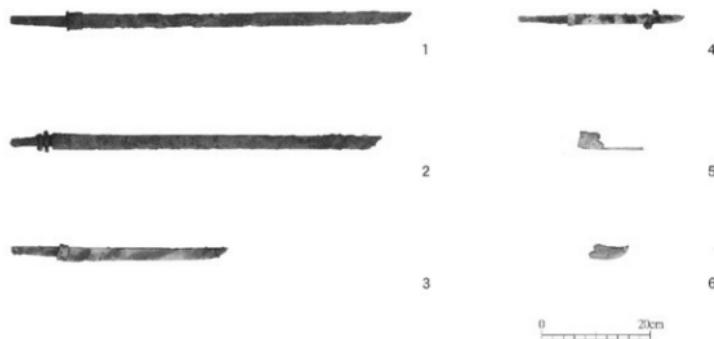


図版60 調査遠景写真



1. E-2 平瓶    2. E-3 平瓶    3. E-4 酒    4. E-5 長頸壺  
 5. E-1 長頸壺    6. C-1 壺    7. C-2 壺

図版61 出土遺物 (1)



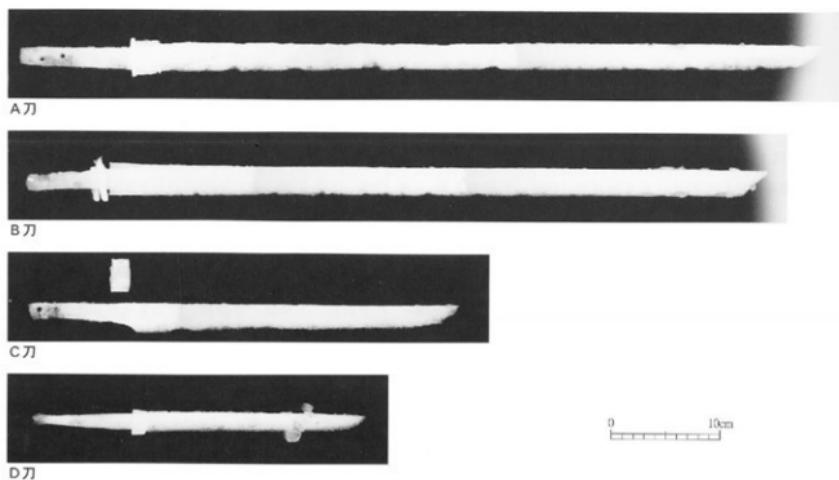
1. A刀  
 2. B刀  
 3. C刀  
 4. D刀  
 5. N-6 鞘口金具  
 6. N-7 鞘尻金具

図版62 出土遺物 (2)



1. N-7環(A刀) 2. N-8鐸(B刀) 3. N-9把緣(B刀) 4. N-10(C刀)  
 5. N-1金具 6. N-2金具 7. N-3金具 8. N-11鞘尻金具

图版63 出土遗物(3)



图版64 出土遗物(4)

# 大年寺山横穴墓群出土人骨について

独立行政法人 国立科学博物館 人類研究部 坂上 和弘

大年寺山横穴墓群は宮城県仙台市太白区向山四丁目に所在し、大年寺山の北斜面に構築されている。周辺には愛宕山横穴墓群、宗禅寺横穴墓群などが存在し、慈じて向山横穴墓群と呼ばれている。大年寺山横穴墓群は昭和62年と平成元年にも調査されているが、平成18年における今回の発掘調査により17基の横穴墓が新たに発見され、合計43基が調査されたことになる。今回発掘調査された第5号墓、第6号墓、そして第7号墓から出土した上顎から、7世紀末から8世紀前半の年代が考えられている。

今回調査された17基のうち、人骨が出土した横穴は第4号墓、第6号墓、そして第7号墓である。それらの横穴墓から出土した人骨は複数個体からなるが、いずれも保存状態が悪く、計測に耐えうるほど形態を保持している骨はない。そのため、本報告書では横穴墓ごとににおける最小個体数、性別、大まかな年齢区分を記載するのみになる。本報告書における骨の番号は発掘時における取り上げ番号を意味しており、同定不可能であった骨はこの報告書では記載していない。

## 第4号墓

第4号墓から出土した人骨は非常に少なく、かつ脆いため、同定可能であった骨片は4片であった（写真3の最下段）。写真3最下段の左から順に、前頭骨、頭頂骨、左上顎骨、そして左側頭骨である。全ての骨の骨質は薄く、頭骨の各骨（前頭骨、左右頭頂骨、左右側頭骨、そして後頭骨）を開節する縫合という部分はまったく閉鎖しておらず、完全に開放している（縫合は加齢とともに「開放→閉鎖→融合→消失」という段階を経て変化する）。また、左上顎骨に植立している歯は第二乳臼歯と第一大臼歯であり、第一乳臼歯はかなり磨耗している。これらのことから、この個体は10歳前後の小児であると推定される。

## 第6号墓

第6号墓における人骨の出土状況は図1に示す通りである。ここでは24個の人骨片が同定可能であった。その詳細は表1および2と写真1に示している。

写真1の中段では第6号墓で同定可能であった大腿骨を示しているが、上下に走る点線よりも向かって左側の26番、28番、そして39番が右大腿骨で、点線の右側の7番、8番、10番、31番、32番、そして40番が左大腿骨である。左大腿骨の8番、31番、32番、そして40番は同一部位が重複しているため、第6号墓には少なくとも4個体が埋葬されていたと考えられる。

写真1の上段には第6号墓で同定可能であった頭骨を示している。写真1の1番は今回の調査で発掘された人骨のなかで最も保存が良いもので、頭骨の正面観、左側面観、右側面観、上面観、下面観、そして後面観を示している。この頭骨では乳様突起や外後頭隆起が大きく、眉弓が突出している形態を持ち、これらはこの個体が男性であることを示唆している。上顎の右第三大臼歯は萌出し、蝶後頭軟骨結合部は融合していることから、この個体が20歳以上の成人であることがわかる。また、切歯縫合も消失しているが、冠状縫合、矢状縫合、そして人字縫合という頭蓋主縫合は外板・内板とともにほとんど融合は見られない。上顎骨に植立している歯は右第一大臼歯から第三大臼歯であるが、いずれも象牙質が露呈するほどの磨耗は見られない。以上のことから、この個体の年齢は成人であり、青年～壮年期（20歳代～40歳代）であると思われる。他の特徴としては、前頭縫合が残存しており、後頭骨の右側に大きいラムダ骨があることが挙げられる。

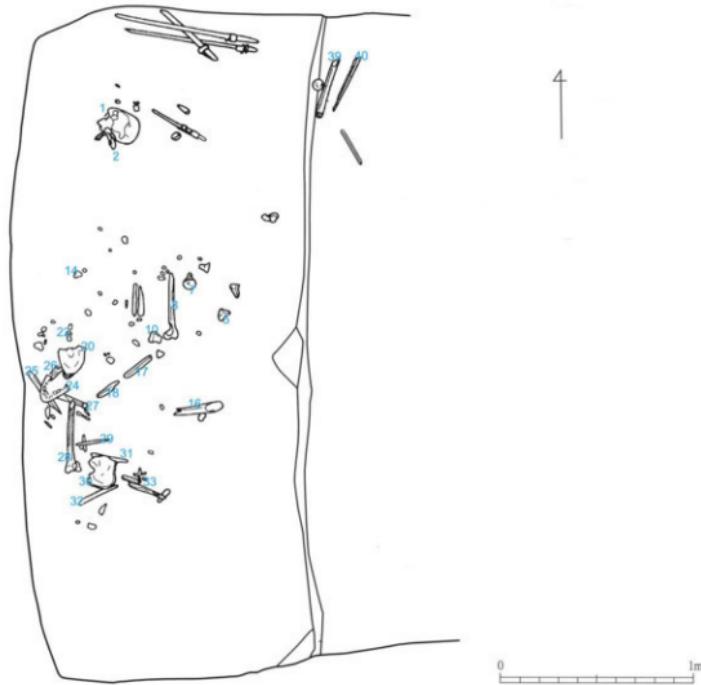


図1 第6号墓の発掘状況

標本番号	部位
1	蝶骨
2	下顎骨
5	右距骨
7	左大腸骨頭
8	左大腸骨
10	左大腸骨遠位端および左脛骨近位関節面
14	前頭骨
16	左膝蓋骨および左脛骨
17	右脛骨
18	右脛骨
20	前頸骨および後頸骨
22	蝶形骨および口蓋骨
24	下顎骨
25	右大腸骨
26	右上腕骨および右尺骨
27	左脛骨
28	右大腸骨
29	右手の第三基節骨
30	右側頭骨、右頸頂骨および後頸骨
31	左大腸骨
32	左大腸骨
33	左脛骨および左側頭骨岩様部
39	右大腸骨
40	左大腸骨

表1 第6号墓の標本のうち、同定可能な  
標本番号とその部位

上顎右	上顎左
中切歯	中切歯 1
側切歯	側切歯 2
犬歯	犬歯
第一小白歯	第一小白歯
第二小白歯	第二小白歯
第一大臼歯 1	第一大臼歯 1
第二大臼歯 2	第二大臼歯
第三大臼歯 1	第三大臼歯 1
下顎右	下顎左
中切歯	中切歯
側切歯	側切歯 1
犬歯	犬歯
第一小白歯	第一小白歯
第二小白歯 1	第二小白歯 2
第一大臼歯 3	第一大臼歯 4
第二大臼歯 1	第二大臼歯 2
第三大臼歯	第三大臼歯 1

表2 第6号墓から出土した歯種別の数  
上顎骨および下顎骨に植立した歯も含む

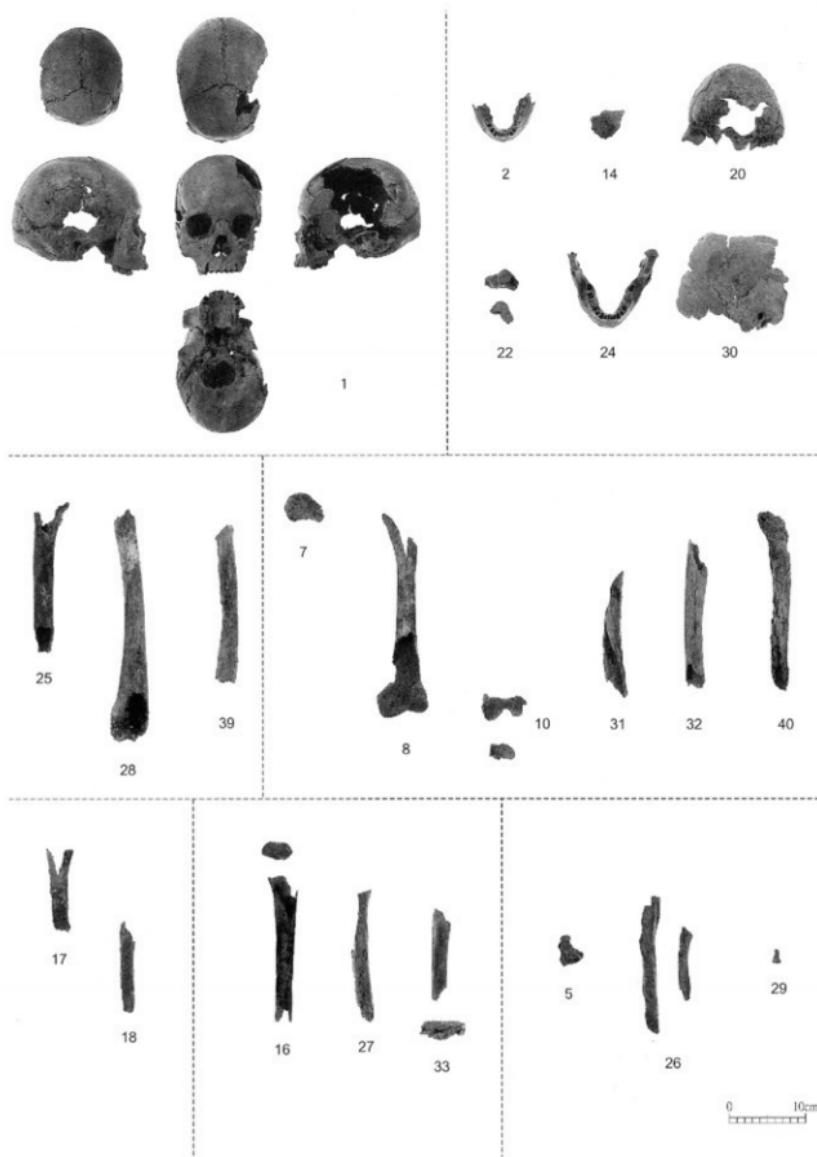


写真1 第6号墓出土人骨の保存状態

20番の頭骨は後頭骨および左右側頭骨から成る(写真1、下面観のみ)。この個体の乳様突起は大きく突出するため、男性である可能性が高い。この個体で年齢を判断できる形態は人字縫合しかないが、この縫合は外板・内板とも重合していないため、高齢者ではない。また、頭骨全体の大きさは未成年のものではない。以上のことから、青年～壮年(20歳代～50歳代)と思われる。

30番の頭骨は右頭頂骨、右側頭骨、および後頭骨の右側が保存されている(写真1、右側面観のみ)。この個体でも乳様突起は大きく突出し、男性的な形態を示している。この個体の縫合は右の人字縫合のみ利用できるが、内板では完全に消失し、外板では一部消失している。そのため、この個体の年齢は壮年以上(30歳代以上)である可能性が示唆される。

表2では第6号墓から出土し、同定可能であった歯の本数を歯種別に示している。これを見ると、第6号墓では下顎左第一大臼歯が4本と最も多く存在する。これは歯の本数から導き出される最小個体数も4個体であることを意味している。また、堆積土から発見された歯のうち一個体分はまったく咬耗が見られない大臼歯が存在しており、このことは上記の頭骨で見られた個体以外に青年(20歳代)以下の個体が存在していた可能性を示唆している。

上記のことから、第6号墓には少なくとも4個体が埋葬され、その内、成人男性3個体、青年以下1個体が含まれると推測できる。

第6号墓の遺体が死亡直後に横穴に安置された一次埋葬であるか、一次埋葬の後に搅乱を受けたものか、それとも横穴以外の場所で一次埋葬され、その後横穴に改葬された二次埋葬なのかは興味深い。図1を一見してわかるように、これらの人骨は解剖学的位置を保っていない。このような状況は本遺跡人骨が死亡直後に横穴で埋葬されたものではない可能性を示唆している。また、第6号墓で発掘された人骨のなかで、全く発見されていない部位は胴体の部分である。他の部位の保存状況を考えると、椎骨、肋骨や骨盤といった部位のみ完全に破損してしまうことは考えにくい。さらに、上肢骨は26番の上腕骨と尺骨、29番の指の基節骨しか同定されておらず、上肢骨の可能性が高い破片もこれら以外には見つかっていない。このような状況が一次埋葬後に搅乱を受けることでもたらされる可能性もあるが、横穴での埋葬時に身体の部位を選択していた可能性も否定できない。また、1番の頸骨と2番の下顎骨、10番の左大腿骨遠位端と左脛骨近位開節面、26番の右上腕骨と右尺骨といった部分で骨の開節を示唆する位置関係が見られた。10番と26番に関しては、これらの骨の関節部分は保存状態が悪いため、本当に同一個体のものであるかどうかは不明ではあるが、1番に植立している上顎歯と2番に植立している下顎歯は咬合面での噛み合わせが適合するため、同一個体のものである可能性は極めて高い。よって、少なくとも1番の頸蓋骨は埋葬時にある程度軟部組織が残っていた可能性がある。

以上のことから、第6号墓の遺体は単純な一次埋葬ではなく、搅乱をうけたか二次埋葬であり、部分的に軟部組織が残っている状況での埋葬だったのではないだろうか。しかし、骨の保存状況は偶然に強く左右されるため、これはあくまで推測の域をでない。

## 第7号墓

第7号墓における人骨の出土状況は図2に示す通りである。ここでは39個の人骨片が同定可能であった。その詳細は表3および4と写真2および3に示している。

第7号墓の最小個体数を考えるのに最も適した部位は頭骨である。写真2の点線で囲まれた頭骨は第7号墓で発掘された頭骨のうち、全て人字縫合(左右頭頂骨と後頭骨が開節する部分)が重複しているものである。そのため、第7号墓には少なくとも4個体が埋葬されていたと考えられる。

1番は前頭骨、左右頭頂骨、そして後頭骨の一部からなる頭骨である(写真2、正面観と上面観)。図2を見ると、近接する2番から4番の骨は左側頭骨、左頬骨、そして左上顎骨であるが、1番との接合は不可能であったた

め、同一個体由来のものとして扱っていない。この頭骨の性別を示唆する形態は、前頭骨の眼窓上縁のみであるが、これは丸みを帯びた男性的な印象を受ける。頭蓋主縫合は矢状縫合の外板にのみ痕跡的に残存しているが、その他の縫合は全て消失している。そのため、この個体は壯年以上（30歳代以上）である可能性がある。

14番は第7号墓の頭骨のなかで最も保存状態が良好なものである（写真2）。前頭骨の右半分、左右頭頂骨、左右側頭骨、そして後頭骨が保存されている。写真2では14番頭骨の正面観、右側面観、上面観、下面観、そして後面観を示している。この個体の乳様突起は比較的小さく、前頭骨の眼窓上縁も薄い。これらの形態特徴は女性的なものであり、頭骨全体の大きさも比較的小さいことから、この個体は女性である可能性のほうが高い。頭蓋主縫合は矢状縫合の一部分のみ消失している。そのため、この個体は壯年以上（30歳代以上）である可能性がある。

16番は前頭骨の右側と右側頭骨からなる頭骨である（写真2、上面観のみ）。この個体の性別を示唆する形態的特徴は保存されておらず、また、縫合の状態も破損部分が多いため、性別・年齢は不明である。

18番は前頭骨と左右頭頂骨および後頭骨の一部からなる（写真2、上面観のみ）。この個体も性別を示唆する形態的特徴は保存されていない。頭蓋主縫合はすべて開放しているため、この個体は若年～青年（10歳代～20歳代）に属すると思われる。形態的特徴として、この個体の人字縫合には縫合間骨が非常に多く見られる。

19番は後頭骨と左右頭頂骨の一部が存在する（写真2、外表面のみ）。骨表面の破損が激しく、性別を示唆する形態的特徴も保存されていない。人字縫合は外板では大部分が消失し、内板では完全に消失している。よってこの個体は壯年以上（30歳代以上）である可能性がある。

21番は前頭骨と左右頭頂骨の一部、後頭骨と左右頭頂骨の一部の二つに分かれている（写真2、外表面のみ）。これらは破断面があるものの、内板の表面形状は類似して連続性が確認可能であり、また同じ地点から発見されたものであるため、同一個体由来ものである。この頭骨の眉弓は比較的高く隆起し、眼窓上縁は丸みを帯びているため、性別は男性である可能性の方が高い。頭蓋主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の外板は痕跡的に残存しているが、その他は全て消失しているため、この個体は壯年以上（30歳代以上）である可能性がある。

42番は後頭骨の一部のみ保存されている（写真2、外表面のみ）。この後頭骨は他のいずれの頭骨とも接合しない。この骨には性別を示唆する形態的特徴は保存されておらず、人字縫合部も大部分が破損しているため、性別・年齢は不明である。

50番は前頭骨の右側と右頭頂骨および右側頭骨、そして後頭骨の一部が保存されている（写真2、正面観、右側面観、そして上面観）。乳様突起は大きく突出し、眉弓、眼窓上縁共に男性の特徴を示すため、この個体は男性である可能性が高い。頭蓋主縫合は外板では痕跡的に残存しているが、内板では全て消失しているため、この個体は壯年以上（30歳代以上）である可能性がある。この個体の前頭骨には直径1cm程度の穿孔が存在するが、これが死亡時期前後に生じたものか死後変化で生じたものかは判断できない。

表4では第7号墓から出土し、同定可能であった歯の本数を歯種別に示している。これを見ると、第7号墓では上頸左第一大臼歯が8本と最も多く存在し、歯の本数における最小個体数も8個体であることを意味している。

上記のことから、第7号墓には少なくとも8個体が埋葬され、その内訳は成人男性3個体、成人女性1個体、性別不明の若年～青年1個体が含まれると推測される。

図2を見ると、第7号墓の人骨の散布状況にある傾向が存在する。頭骨は第7号墓の壁面に沿ってほぼ均等な間隔で位置している。それに対して、同定可能であった大腿骨は左右あわせて9本であるが、それらの内、44番、51番そして52番の三本以外は北西隅に集中している。また、第6号墓と同じく、第7号墓では少なくとも8個体も埋葬されているにも関わらず、体幹部の骨は一つも見つかっていないし、上肢骨は9番の左上腕骨のみ同定可能であった。以上のことから、第6号墓と同じく、第7号墓も一次埋葬の後に搅乱を受けたものか二次埋葬であり、特に体の部位によって配置場所が異なっていた可能性がある。

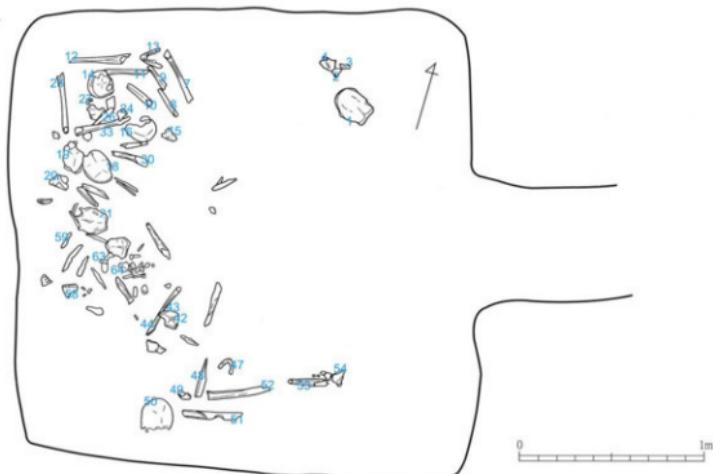


図2 第7号墓の発掘状況

標本番号	部位
1	頭骨
2	左上顎骨
3	左頸骨
4	左側頭骨
7	左大顎骨
8	右脛骨
9	左上腕骨
10	左脛骨
11	右大顎骨
12	右大顎骨
13	下頸骨
14	頭骨
15	右側頭骨
16	前頭骨、右頸頭骨および下頸骨
18	前頭骨および左右頸頭骨
19	左右頸頭骨および後頭骨
20	左側頭骨
21	頭骨
23	左大顎骨
24	右上顎骨
26	左大顎骨
27	右大顎骨遠位端
30	右大顎骨
33	左上顎骨
42	後頭骨
43	左側頭骨岩様部
44	右大顎骨
47	下頸骨
48	右脛骨
49	右頸骨および右上顎骨
50	前頭骨および右側頭骨
51	左大顎骨
52	右大顎骨
53	左脛骨
54	後頭骨
58	右上顎骨
59	下頸骨
63	左側頭骨岩様部
64	左頸骨

表3 第7号墓の標本のうち、同定可能であった標本番号とその部位

上顎右	上顎左
中切歯	1
側切歯	1
犬歯	2
第一小白歯	5
第二小白歯	4
第一大臼歯	5
第二大臼歯	3
第三大臼歯	2

下顎右	下顎左
中切歯	1
側切歯	1
犬歯	2
第一小白歯	6
第二小白歯	1
第一大臼歯	2
第二大臼歯	1
第三大臼歯	2

表4 第7号墓から出土した歯種別の数  
上顎骨および下顎骨に植立した歯も含む

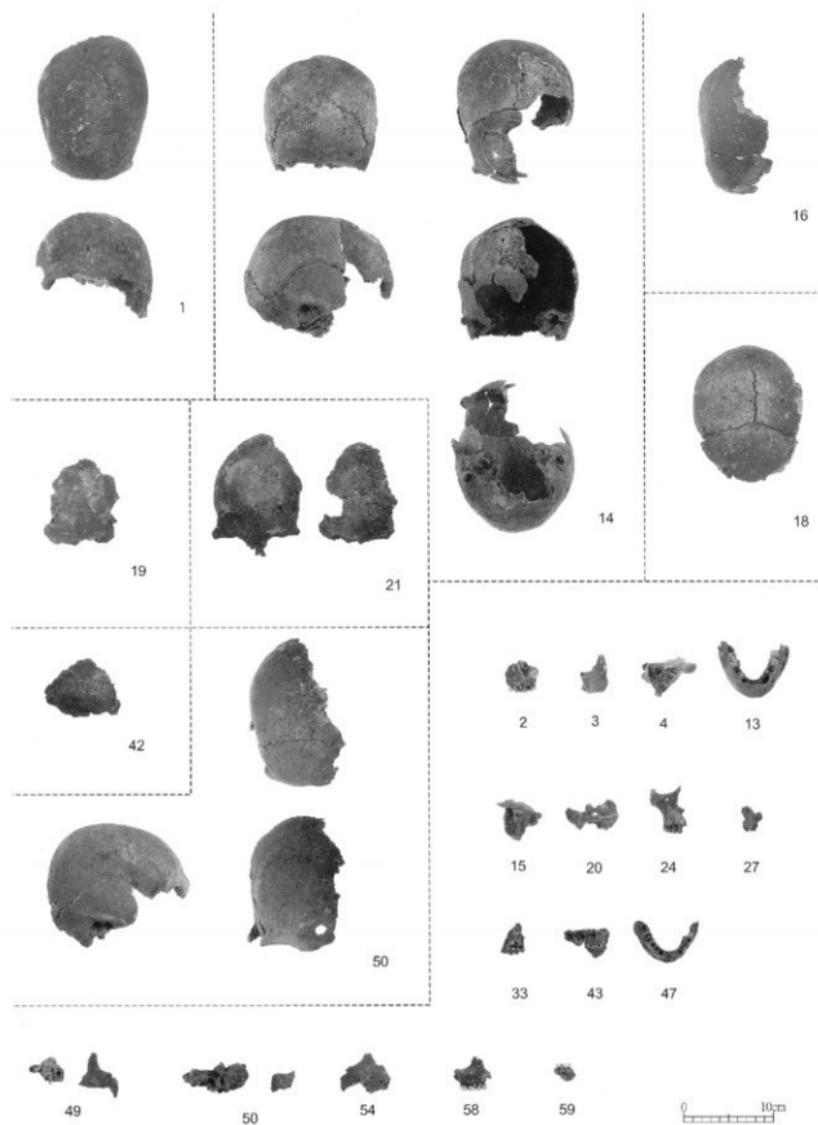
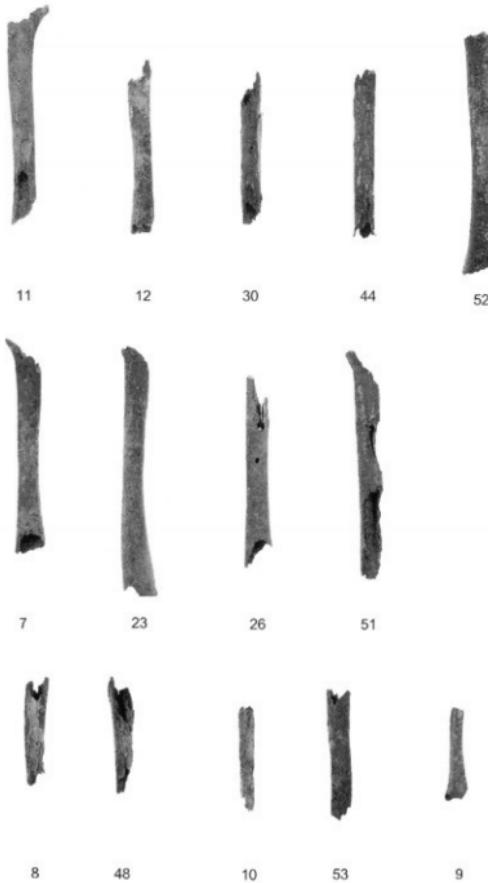


写真2 第7号墓出土頭骨の保存状態



0 10cm

写真3 第7号墓の四肢骨と第4号墓出土人骨の保存状態

本遺跡の近隣に位置し、総じて向山横穴墓群と呼ばれる遺跡のうち、人骨が出土している茂ヶ崎横穴墓群、愛宕山装飾横穴古墳、そして宗禅寺横穴群の報告書を見ると、いずれも頭骨、大腿骨は存在するが、体幹の骨に関する記載はなく、上肢骨に関する記載も宗禅寺横穴群の9号墓の上腕骨2本しか存在しない。これらの横穴群で報告されている最小個体数は14個体であり、今回の15個体と合わせると、少なくとも29個体が向山横穴墓群において発見されていることになる。しかし、これだけの個体数にもかかわらず、椎骨や寛骨などの体幹骨がまったく発見されていない。長期間にわたる埋葬のため、体幹骨が破損し消失した可能性や一次埋葬後の擾乱で体幹骨が全て破損または取り除かれた可能性もあるが、むしろ身体の部位を選択して改葬していたと考えたほうが自然ではないだろうか。向山横穴墓群における今後の調査の拡大と人骨資料の増加が待たれる。

#### ＜参考文献＞

- 阿部修二、馬場悠男、茂原信牛、芹澤政雄、江藤盛治（1985）愛宕山装飾横穴古墳出土の人骨、宮城県仙台市愛宕山装飾横穴古墳発掘調査報告書  
葉山杉夫（1976）宗禅寺横穴群出土の人骨について、仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書  
石田豊（1989）仙台市茂ヶ崎横穴墓群3号横穴出土の人骨について、仙台市茂ヶ崎横穴墓群発掘調査報告書  
潮田季茂、吉野峰生（1990）白骨死体の鑑定、令文社、東京  
Ubelaker D.L.(1999) Human Skeletal Remains. Taraxacum, Washington

# 報告書抄録

ふりがな	だいねんじやまよこあなぼぐん							
書名	大年寺山横穴墓群							
副書名	－平成18年度調査－							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第311集							
編著者名	長島榮							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL. 022-214-8893・8894							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だいねんじやまよこあなぼぐん 大年寺山横穴墓群	仙台市太白区 向山4丁目94-3、4	04100	01293	38° 14' 35"	140° 52' 43"	20060801 ～ 20060818	250m <sup>2</sup>	共同住宅 建築
所収遺跡名	種別	宅な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
大年寺山横穴墓群	横穴墓	古墳 奈良		横穴墓		須恵器、土師器 金具、鉄刀	人骨同定	

仙台市文化財調査報告書第311集

**大年寺山横穴墓群**

—平成18年度調査—

2007年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区田町三丁目7・1

文化財課 022(214)8893~4

印刷 株式会社 建 設 プ レ 斯

仙台市青葉区折立三丁目2-10

TEL 022(302)0177

